文化の力で大阪に活力を。

OSAKA*文化力

No.112

2011 SPRING 春

特別リポート

関西・大阪文化力会議2011

エズラ・ヴォーゲル ハーバード大学名誉教授

李　御寧 大韓民国初代文化大臣　ほか

関西から 文化力 POWER OF CULTURE

財団法人 大阪21世紀協会

エズラ・ヴォーゲル氏

リレーインタビュー 「私のsweet水都」

イブヌ・ハディ氏

在大阪インドネシア共和国総領事館総領事

中国、インド、米国に次いで世界第４位の人口をもつインドネシア共和国。１万数千もの島々からなり、なかでもバリ島は「最後の楽園」として世界中から観光客が訪れる。関空からも毎日直行便があり、関西在住者にとっては身近な海外リゾート地となっている。昨年１月に赴任されたイブヌ・ハディ総領事を訪ね、インドネシアと日本の文化交流などについてお話しいただいた。

2008年、正式外交50周年記念事業を開催

1958年、日本とインドネシア両国は「日本とインドネシア共和国との間の平和条約」および「両国間の賠償協定」に署名し、正式な外交関係が始まりました。2005年には「新たな挑戦へのパートナー」という両国の共同声明が発表され、以後、「平和で繁栄する未来へ向けての戦略的パートナーシップ」のもと両国関係をさらに高度な次元へ発展させることを表明し、経済面のみならず、文化・人物交流の面で幅広い友好・協力関係を構築してきました。

その50周年の節目に当たる2008年は、幅広い分野での長年の友好関係をさらに強化する絶好の機会として、次の半世紀に向け、両国国民の交流と世代を超えた相互理解を拡大し、深化させることを目的に両国でさまざまな記念事業を行いました。大阪では中之島の中央公会堂で盛大な交流行事が行われました。

日本のアニメ・マンガは若者に人気

そうした友好関係への努力の結果、インドネシア本国において、日本の文化は広く知られるようになりました。日本のアニメや漫画は若い人たちにとても人気があります。日本食レストランも増え、高級店からリーズナブルなお店まで、いろいろな日本食を楽しめます。大阪に観光で訪れるインドネシア人も増え、USJや大阪城が人気の観光スポットになっています。

私は1996年に経済担当領事として４年間、大阪に在任しました。今回、２度目の在任ですが、大阪は大好きですね。町全体に活気があって、ビジネスの動きが活発です。そして、大阪の人たちが素晴らしい。明るくて、フレンドリーで、ウオーム・ハート・・・さまざまな所で出会う大阪の人たちの印象です。食べものも美味しいですね。天ぷらも好きですし、鉄板焼きの神戸肉の味わいは最高です（笑）。

観光・経済・教育の交流を深めたい

そうした経験から、私は大阪とインドネシアの関係をもっと深めたいと考えています。第一に観光ですが、インドネシアは、ダイビングやエコツーリズム、文化、芸術など、都市や地方それぞれに特徴ある伝統や文化、観光が楽しめます。ガムラン音楽や影絵芝居、バティック、ふたつの世界遺産をもつジョグジャカルタや、オランウータンが生息するカリマンタン島など、バリ島だけでなく、インドネシア各地に来ていただきたいですね。

次に経済的な交流です。インドネシアに進出する関西の企業も増えてきましたが、両国をビジネスで交流する人がもっと増えてほしいと願っています。

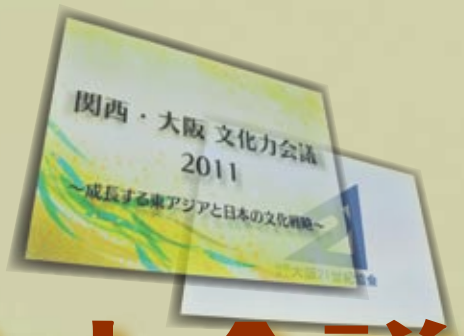
３番目は教育面です。日本の文部科学省は、2020年を目標に留学生を30万人まで増やそうと計画し、大学の国際化を図るグローバル30（G30）という日本への留学奨励プロジェクトを開始しました。日本の13大学で英語授業で勉強できる取り組みが始まりました。また、インドネシアのダンスを学ぶために日本からも留学生が来ています。私はこうした3つの側面から今後ますます両国の交流が深まることを願っています。

イブヌ・ハディ（Ibunu Hadi）氏

1960年インドネシア・リアウ州生まれ。1986年インドネシア大学経済学部卒業、1990年オーストラリア・マッコーリー大学経済学部修士号取得。1986年インドネシア外務省入省。1991年在香港総領事館・経済担当副領事、1994年外務省財務投資協力部次長、1996年在大阪総領事館経済担当領事、2000年外務省APEC調整担当次長、2002年駐米大使館経済担当参事官、2005年外務省アジア太平洋アフリカ地域協力部部長を歴任。2010年より現職。

成長する東アジアと日本の文化戦略

近年、西欧諸国では都市再生と文化立都が競われ、また力強い成長を見せる東アジア諸国では、韓国のように国家戦略として文化を推進し、成果をあげている。一方、日本の国家予算に占める文化の比率はわずか0.13%で、フランス(0.86%)や韓国(0.93%)に比べ極めて低い。関西の自治体においても文化予算が切り詰められ、地域の個性が失われつつある。こうした状況で、日本はいかにして文化力を高めていけばよいのか。中国の著しい成長や韓国の力強い文化戦略を参考にしつつ、その方策を探った。



関西・大阪文化力会議 2011

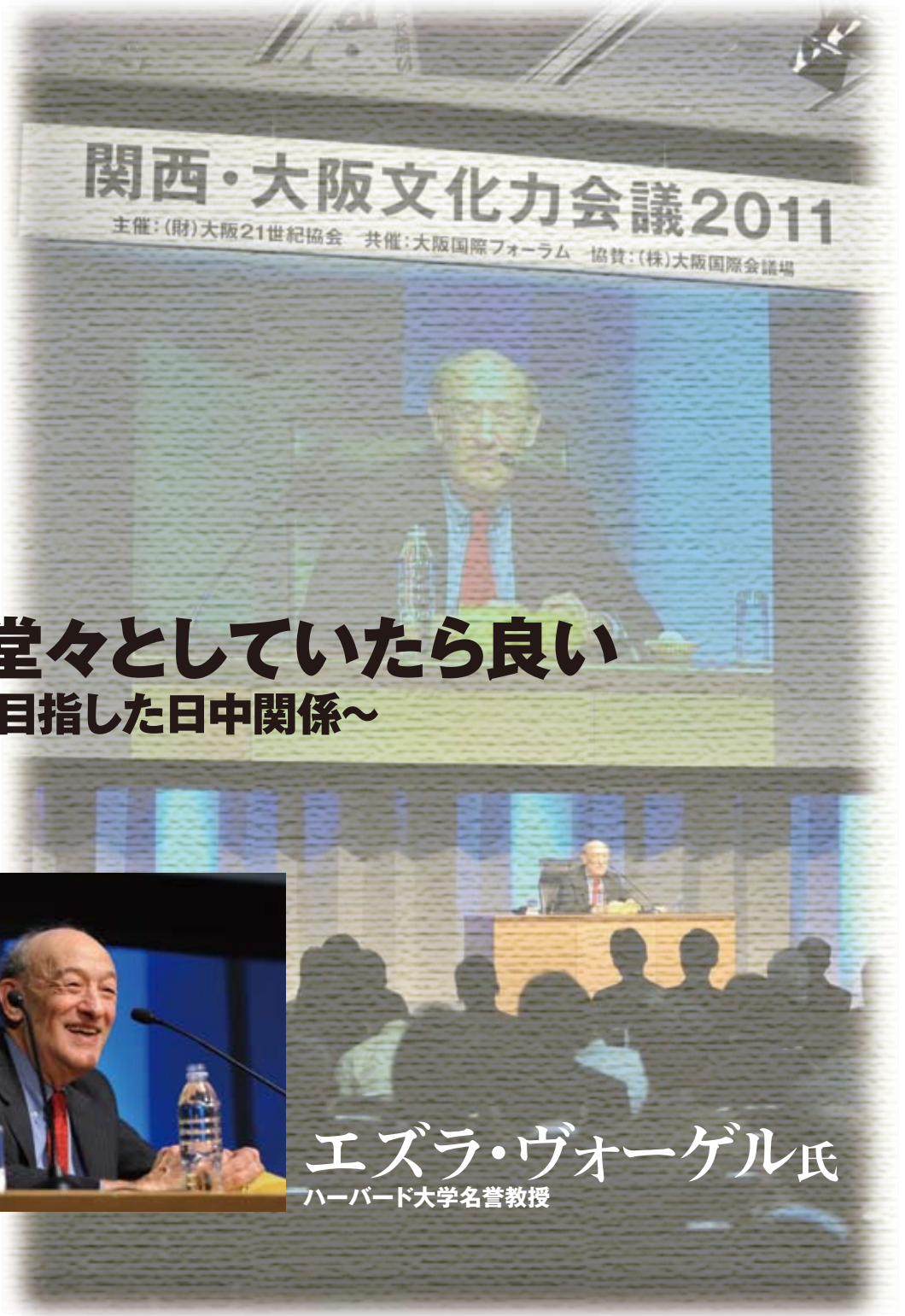
2011.1.18　大阪国際会議場

主催：財団法人大阪 21 世紀協会
共催：大阪国際フォーラム
協賛：株式会社大阪国際会議場
後援：社団法人関西経済連合会
大阪商工会議所
社団法人関西経済同友会

文化力で真の情報源たる国へ!

大阪21世紀協会会長 **熊谷信昭**

今は、インターネットによってさまざまな情報を得ることができます。しかし、インターネットのデータベースから得られる情報は、すでに公開された情報、すなわちデータに過ぎず、決してインフォメーションソース(情報源)とは呼ばれません。国や地域が活性化するためには、真の意味での情報源にならなければなりません。そのためには、真似やまがい物ではない個性あるユニークな学術、技術、芸術、ファッション、娯楽等々の文化を創出するとともに、伝統芸能や歴史遺産などを大切に維持・継承していくことが必要です。そうすることで直接触れたり見たりしないと得られない、真の情報源になるわけです。文化はお金で買えるものではありませんが、お金をかけずに文化を創出したり、継承・維持していくこともできません。国や地域が末永く繁栄し、世界から敬愛されるような名誉ある国や地域となるためには、文化立国、文化立都を目指さなければならないと思っています。



日本は堂々としていたら良い
～鄧小平が目指した日中関係～

エズラ・ヴォーゲル氏
ハーバード大学名誉教授

**日本と東アジア諸国との関係が緊密になる中で、中国との付き合い方をどうすれば良いのか
中国に対し、いかに交流し、文化的関係を築いていけば良いのか。
『ジャパン・アズ・ナンバーワン』の著者であり、
中国研究家として知られるエズラ・ヴォーゲル氏（社会学者）が、
1980年代に経済的、文化的成功をおさめた鄧小平路線を振り返りながら、
これからの中国との関係のあり方について語った。**

鄧小平は日本を熟知

私は近年、中国で鄧小平の研究を行っています。そこで今日は、鄧小平の目指した日中関係からお話したいと思います。

鄧小平は1904年に生まれ、16歳でフランス政府の勤工倹学運動に応募して、渡仏しました。しかし実際には、第一次大戦直後の不況で勉強はできず、重労働ばかりさせられました。1920年、ソ連革命の３年後のことです。

彼は「中国の金持ちよりもフランスの資本主義者はいい生活をしているが、労働者は圧迫されている。しかしもっと圧迫されているのは外国人労働者だ」と感じました。そしてロシア革命の原因は自分にも当てはまると思い、共産党に入党しました。周恩来や陳毅もフランス留学を経て、入党しています。ですから彼らは外国事情に通じていたはずですが、毛沢東は外国について、たぶんわかってはいなかったでしょう。

鄧小平は入党後26年から１年間ソ連へ行きました。彼が78年に行った改革開放政策は、その頃のソ連がとっていた経済政策の影響ではないかと思います。当時のソ連は資本家、自営農、外国企業、外貨などを認め、自由経済を拡大させていました。彼はそのソ連での体験をもとにして、共産党を指導しようと思ったのです。鄧小平は27年からゲリラ活動に身を投じ、37年から12年間は日中戦争と国共内戦に参加しました。49年の中華人民共和国成立後、約1億人が居住する西南部6省の指導者となり、解放と復興を推進しました。そして52年から、失脚していた時期を除いて、中央の役職を歴任しています。78年、彼が中国の最高指導者になった時、軍隊、地方、海外と豊富な体験を積んでいたのです。

文化大革命で追放されていた鄧小平が73年に北京に帰ってきた時、周恩来は肺がんに罹っていたので、国の要人との面会はほとんど鄧小平が行いました。また72年に田中角栄によって日中国交正常化が行われ、73年から75年にかけての外国人客は日本人が最多を占めました。

鄧小平の顧問には廖承志がおりました。彼は国民党幹部の息子で、日本生まれの日本育ち。鄧小平は日本人と面会する前に廖承志から情報を得て、相手について把握していました。

鄧小平は2～3年間に、日本の各政党代表者、地方指導者、メディア代表者、仏教関係者など40以上もの代表団と会っています。ですから78年10月、日中平和友好条約批准書交換のために来日した時、日本の状況をよく理解していました。

国交正常から条約締結へ

1972年、ニクソンが訪中し、米中関係の修復を図りました。反共主義者で名高いニクソンにとってそれは簡単なことではなかったがゆえに、アメリカ国内ではあまり批判されませんでした。これが民主党（アメリカ）であれば弱虫と罵られたでしょう。

鄧小平の場合も「抗日兵だった彼が日中友好を主張するなら」と、反対されることはありませんでした。しかしながら78年まで日中関係はほとんど進展をみませんでした。72年に出した共同声明の中の覇権条項を日中平和友好条約に入れるか否かでもめたからです。中国側は共同声明に基づき反覇権主義を明確にうたうべきだと主張しましたが、この覇権主義はソ連を指す言葉であるため、ソ連の反発を恐れる日本は使用したくなかったのです。

交渉を重ねるうち、日本の外務省が知恵を絞って「もし、反覇権主義という言葉を使うなら、“（日本と中国以外の）第三国に対しては反対しない”という意味のフレーズを入れてはどうか」と提案しました。実務的な人間だった鄧小平もそれを承諾し、ようやく両国の条約締結が実現したのです。

条約締結の背景

鄧小平が日米と仲良くしようとした理由の一つは、中国とソ連が国境をめぐって敵対していたことでした。当時ソ連とベトナムは接近し、中国には東南アジア側から攻撃される危険があったからです。実際にベトナムはカンボジアを攻撃する準備をしていました。ソ連がベトナムの港を使えばインド洋から太平洋まで出入り可能になります。またベトナムの空軍基地から中国を攻撃できます。ニクソンは1969年にグアム島で「我々はアジアで戦うつもりはない」旨を公表していたので、中国はアメリカの脅威はないと判断し、ソ連と敵対していたアメリカと手を結び、ソ連を抑止しようとしたのです。国内では文化大革命が終結しておらず、中国軍も脆弱であったので戦う力はありません。日米と良好な関係は防衛上必要でした。

もう一つの理由は近代化の推進です。彼は76年に失脚し77年に３回目の復帰を遂げた時、工業の近代化を重視し、技術力のある日米の支援を受けたいと考えました。

日本の目覚ましい経済成長は中国に刺激を与えました。韓国、台湾でも経済成長がはじまっており、中国はこれに続くことを望んだのです。

小さい島より大局を

鄧小平は改革開放政策を打ち出す直前の78年10月に訪日しました。背後にあった目的はソ連およびベトナムからの防衛と近代化の援助要請でしたが、彼は来日の理由を表向きには「日中関係を支持した人に感謝を伝えるため」「日中平和友好条約批准書交換」「徐福のように永遠の秘密を知るため」と述べました。徐福は不老不死の仙薬を求めて日本へ来た伝説上の人物ですが、鄧小平は仙薬ではなく産業の秘密を得たいとユーモアを持って話し、非常に歓迎されました。

長い日中交流史の中で、鄧小平は中国指導者として初めて来日し、天皇と会見しました。昭和天皇は戦争のことを遺憾だと表明し、鄧小平はその発言に驚いたとのことです。

日程には工場視察があり、鄧小平は君津の新日鉄を当時会長であった稲山嘉寛氏の案内で訪ねています。稲山氏は日中経済界のパイプ役で、武漢製鉄に技術協力した実績もあり、中国を助けたいという思いを持っていました。鄧小平は滞仏時代に体験した鉄鋼工場での苛酷な労働状態とは比較にならない技術や設備に感動し、宝山製鉄所もぜひ同じような工場にしたいと要望しました。

新幹線に乗ったり、座間市の日産自動車でロボット技術を見たりしたことも、鄧小平にとって近代化への理解につながりました。

関西では松下幸之助氏に会っています。鄧小平が中国における最先端技術を用いたテレビ製造を要請すると、松下氏は「最先端技術は簡単に海外へ伝えられないがそれに次ぐ高い技術を提供する」と約束しました。松下氏にとってこれはビジネスだけではなく、中国の貧しい家庭にテレビを普及させたいという夢を込めた事業でした。

また鄧小平は田中角栄の私邸に訪ねてもいます。訪日前これに難色を示した人もいましたが、面会は実現しました。鄧小平は訪米に際してニクソンにも会いたいとも言っていますが、ウォーターゲート事件があったので実現していません。

その他、宇都宮徳馬氏（参議院議員、日中友好協会会長）、日中総合貿易（LT貿易）に尽力した故･高碕達之助氏の家族に会い、お礼を述べています。側近によれば鄧小平は親しみにくい人物だったそうですが、中国の恩人に対してはこうした行き届いた思いやりを示したのでした。

彼は来日時、東京で記者会見をしています。中国は民主主義国家ではなく彼には記者会見の経験がなかったのにもかかわらず、記者会見は非常にうまくいきました。その原因は正直さにあります。たとえば新聞記者が毛沢東は悪いことをしたのではないかと質問すると、鄧小平は「毛沢東も間違ったが、我々も間違った。我々にも責任がある」と答えています。尖閣列島については「この問題は将来、我々よりも頭のよい人間にまかせよう。小さい島より、我々は大局を重んじる」と前向きな発言をしました。

日本人は戦前から対中ビジネスに熱心でしたが、戦後はアメリカに遠慮して思うにまかせませんでした。それが国交回復でチャンスが到来した。中国は台湾と関係がある企業とは取引しないという条件を出していたので、子会社を作った企業もありました。当時、中国には詳細を調査できませんでした。そういう方法もとりながら、ビジネスが始まりました。

80年代、日本は懸命に援助

鄧小平は日中友好において文化交流も重視しました。80年代に日本の映画、ドラマ、音楽等が中国で紹介され、『おしん』は大変な人気でした。山形の古い時代の母親像は極めて日本的であると思われるでしょうが、子のために努力する母の姿としては普遍性があり、中国人に深い共感をもたらせたのです。この頃、若い中国人学生は日本文化が好きになり、今もその世代は「日本によい小説があったな」というような親しみの気持ちを持っています。鄧小平は実に将来を見据えて、文化施策を行ったといえます。

文化交流成功の一方で、プラント事業などは中国政府内に混乱があったため、契約中止や延期が多発し、当初日本の財界は非常に失望しました。しかしその後改善されて経済交流も非常に活発になっていきました。当時、日本のODAは非常に強力でした。JICA（国際協力機構）も他国より多くの援助金を出していました。戦後賠償を求めないと決めたのは国民党ですが、日本はその代わりに援助を行いました。日本企業は技術、品質管理、経営などあらゆる方面で援助しました。上海のJETRO（日本貿易振興機構）の斡旋で日本の中小企業もそれに協力しました。

日本は第二次大戦の贖罪として一生懸命に援助し、鄧小平もそれをわかっていました。しかし今、中国は日本の援助について黙っています。日本人は第二次大戦時の過ちを話すべきであり、中国人は80年代に受けた援助を話すべきです。

愛国主義教育の功罪

日中関係において最初に起こった問題は、プラント契約の中止や延期、次は86年の胡耀邦の失脚です。胡耀邦は日中交流に高い理想を持ったまじめな人物でしたが、準備不足なのに3,000人の日本青年を招待するなどして批判を受けました。日本と最もいい関係を持っていた指導者の失脚は、両国間に非常に悪影響を及ぼしました。

最近の問題は愛国主義教育です。愛国主義教育は89年の天安門事件後、共産党から若者の支持が離れることを恐れて行われました。それまで中国は政治教育を重んじた社会主義教育を行っていましたが、ソ連や東欧諸国の瓦解によって、中国は社会主義教育の限界を痛感。それに代わるものとして愛国主義教育をはじめたのです。

私が知る限り、最初、愛国主義教育は反日的ではありませんでした。しかし宣伝部は人心を動かすために手っ取り早く反日を利用しました。たとえば日本で一部の右翼が南京事件はなかったと発言しても日本の新聞は相手にしませんが、中国では大見出しで新聞に載せる。すると中国の読者はそれが日本人を代表する意見だと思って騒ぐ。宣伝部はこういうことをどんどん行いました。

戦争体験をした人も少なくなっている現在、反日は戦時の嫌悪に基づくのではなく愛国主義によって植え付けられたものになっています。

中国が極端に走る理由

私は最近、中国人が極端なことをする理由は三つあると思います。

一つめはアメリカの金融危機、とくにリーマンショックです。「アメリカは経済的に失敗したが中国は成功した」「我々は高度成長を続けている」「アメリカや日本を追い越した」という驕慢な気持ちが、極端な行動に表れているのではないでしょうか。あえて失礼な言い方をしますが、バブル期の日本人にもそんなところがあったと思います。

二つめは国内政治の混乱です。鄧小平は強い権力を持っていましたが、胡錦濤はそうではありません。だからいろんな人がめいめい勝手な考えで行動する。その中には変な人もいるのです。

三つめは国際関係の拡大。企業の場合、かつては国際課が窓口でしたが、今はどの部署でも海外とやりとりしています。軍隊でも同じようなことになっています。

日本は堂々としていたら良い

では中国とどう付き合ったらよいのかというと、中国が難しい顔をしていても、日本は堂々としていたらよいのです。関西は上海との特別な関係があるので、そのパイプも駆使すべきです。上海の役人の中には中国政府が変なことをやっていると自覚し、日本と良好な関係を保ちたいと思っている人もいます。関西の大学が持つ中国人のパイプ、経済界のパイプ、いい関係を作るチャンスがあれば、それらを十分に使うべきだと思います。

文化戦略としては、中国でも人気の高いアニメの訴求がまず考えられます。仏教も中国で流行していますから、奈良や京都などの古都の魅力も訴求できます。音楽、クラシックなど、紹介できるものはいろいろあります。それから関西経済同友会とハーバード大学が協力したような交流会や勉強会を行うのもよいと思います。

現在、中国は高度成長していますが、日本がそうであったように、今後、経済成長率が下がるのは必然です。中国はかつて日本から工業を学んだように、高度成長が失速した時にどうすべきかを日本の経験から学ぶべきだと思います。私は日中両国に好意を持っていますし、良い関係が続いてほしいと願っています。日本は難問に遭遇しても、堂々としてできるだけ交流を進める以外はないと思います。

エズラ・ヴォーゲル　Ezra Feivel Vogel
ハーバード大学名誉教授
1930年生まれ。1950年オハイオ・ウェスリアン大学卒業。アメリカ陸軍に2年間勤務の後、1958年ハーバード大学社会関係学科で博士号を取得。1960年イェール大学精神医学部助教授を経て、1961年ハーバード大学の博士研究員として中国の歴史の研究に従事。1964年からハーバード大学講師、1967年にハーバード大学教授（社会学）。同大学内で、東アジア研究所長、東アジア研究評議会議長、日米関係プログラム所長、フェアバンク東アジア研究センター所長などを歴任。1993～95年、CIA国家情報会議（CIAの分析部門）東アジア担当国家情報官。2000年にハーバード大学を退官、以降、鄧小平による中国の改革の研究を本格化させている。著書に『日本の新中間階級―サラリーマンとその家族』、『中国の実験―改革下の広東』、『ジャパン・アズ・ナンバーワン―アメリカへの教訓』、『ジャパン・アズ・ナンバーワン再考―日本の成功とアメリカのカムバック』など多数。

文化の力で、生命資本主義の時代へ

李　御寧（イ オリョン）氏
韓国初代文化大臣

日本の文化に精通し多数の著書を持つ韓国の初代文化大臣、イ・オリョン氏。基調講演では、文化とはなにかを定義し、日本文化が形成されてきた過程からその本質を解明。日本、韓国、中国をはじめとする東アジア諸国が、今後歩むべき指標について大局的な観点から提起を行った。

世界はなぜ文化を重視するのか

文化という言葉はとても定義しにくいもので、今、使われている意味だけでも130を超えるそうです。1000人の文化人類学者がいれば1000の定義があるということです。欧米で初めて文化という言葉が辞典に載ったのは1793年、ドイツ国語辞典といわれています。「culture」は、ラテン語で「耕作する」「住む」「宗教的な崇拝」を意味する言葉です。日本では江戸時代に文化という年号(1804～1817)があります。そのときの文化とは文治教化を意味し、武力で国を治めるのではなく文化=徳や教養で治めることを指しています。その次は明治に入り、文明開化という意味で使いました。西洋から新しい文化が入ってきたときの文明開化を訳して文化という言葉を使いました。けれども現在は日本、韓国、中国でも、西洋のcultureという意味で文化という言葉が使われています。

歴史を遡れば、軍事力と経済力があれば国の力が世界に通用する時代がありました。今も実情はそう変わっていませんが、ではなぜ人々が文化力というものを重視するのか。それは、軍事力と経済力を発揮するために文化力というひとつの基盤がなければならないからです。現代のアメリカはハリウッドに代表されるようなメジャーな文化、そして英語という言語が世界に通用するからこそ世界を支配しているのです。

世界中で今、文化や宗教、文明の衝突が頻発しています。世界の文化力とはなにかを本気になって考えなければならない時代になっています。日本は戦後、自衛隊となったものの軍事力もあり、経済力は世界トップクラスです。中小企業でも世界に通じる技術力をたくさん持っています。レアアース、レアメタルの世界最大の消費国は日本です。そして中国の輸出規制を何年も前から想定し、シャープなどではすでに代替マテリアルの開発にほぼ成功しています。こういう観点に立つと、軍事力と経済力を併せ持つ日本に今、最も重要なのはまさに文化力といえるでしょう。

文化は弱いもの、だからこそ必要

じつは私は、文化は力ではないと思っています。文化を力と見ると、中国の文化大革命のような大変なことが起こる。日本の軍国主義は、日本人の心に深く根づいた花の文化である桜を使い、「花と散れ」と軍事力を後押ししました。文化は力ではなく本当は弱いものです。しかし弱いからこそ必要なのです。文化そのものに対するコンセプトを変えなければなりません。

文化というのはじつに微妙なものです。韓国が日本の植民地だった時代、日本人が使う「キムチ」という言葉には韓国人への差別や偏見も含まれていました。これを食べる者はニンニク臭いと。しかし日本人がどんどんキムチを食べるようになり、韓流ブームが起こるとキムチはひとつの食文化として日本人に融け込んでいきます。ヨン様ブームもそうです。『冬のソナタ』は韓国でもヒットしましたが、日本のように大量のヨン様グッズがつくられDVDが売れるような大ブームにはなりませんでした。ヨン様は日本に来て、日本独自のヨン様になったのです。村上春樹の小説も韓国では大変な人気ですが、それと反日感情は全く関係ありません。これらの現象を見ると文化は普遍的ではなく、個性を持ち、政治、民族、歴史といった社会背景を超えていく力がある。これは文化と宗教だけでしょう。

文化は対立するものの橋渡しをする

20世紀の生物学者ゲーレンは、人間は猿が進化した生物ではなく、形態学的にサルの胎児の進化が停滞した「欠陥動物」であるといっています。生きていくための手段を欠いているため、直立し、言葉をつくり、技術をあみ出し、文化的手段を講じて欠陥を補完するようになったというのです。そんなふうに考えると文化というものが理解しやすいのではないでしょうか。全ての生物は生来的に与えられた能力で生きていける。進化も文化も必要ない。この自然の秩序から離れ、自然以外の環境を創り出さなければ生きていけない生物、それが人間なのです。

猿は、敵が襲ってくると4本の手足を使って木に登って逃げることができますが、両手しか使えない欠陥の猿(人間)はそれができません。皆さんならどうして敵から身を守りますか？対策がなければ死ぬのです。ふと見れば地面に石ころが転がっています。ならばそれを手に取り敵に投げればいいのです。この行為が私たち人間を生かしてきました。自然の石はそこで文化の石になったんです。それを投げた瞬間、石は身体から離れて飛んでいく。敵に触れることなく身を守る、新たな抽象的空間を出現させたのです。そうしてもっと遠く、もっと早く投げることで欠陥を補ってきた。これが文化なのです。

古事記のなかで、最初の神、イサナギは妻のイザナミが死に黄泉の国に行ってしまうと恋しくてたまらなくなり訪ねていきます。そこで見たものは体中に蛆がわいたイザナミでした。イサナギはその姿に怖れて必死で逃げます。追いかけてくるイザナミに彼は蔓草の髪飾りを投げ、櫛を投げ、最後には桃を投げて逃げ切り、黄泉の国の入口を岩でふさぎます。そこでイザナミは言います。「そんなことをするとこれからあなたが生む命を1000名ずつ殺してやる」と。イサナギは「それなら私は1500名ずつ新しい命をつくろう」と言います。死の国と生命のある国の境で何か

が生まれる。そこから初めて文化は始まったのです。死と生という異質なもの、すべての対立するものの調整をしたり接触点をつくったり、橋渡しをするもの、これが文化なのです。これは戦争や科学の世界にもありますが、特に芸術の世界にそれが多い。異質な心と心を結びつける力なのです。

身体性のある文化とない文化

文化には身体性のないものと身体性を持つものの、2つのシステムがあります。先ほど話した石を投げる文化には身体性がありません。体から離れていく抽象的な文化で、石、銃、ミサイル、そしてインターネットもそうです。西洋の文化はこれに当てはまる合理性や数字の世界です。

例えば聖書にあるソロモンの名判決にも、西洋文化の特徴が表れています。それは、二人の女性が一人の子どもを取り合って互いに母親だと主張した話です。裁判官が「それでは子供を2つに分けて持って行け」と命じ、刀で切ろうとすると、「切るな！」と叫んで子どもを護ったほうが本当の母親とみなされました。こんなむちゃな判決がありますか。人間を半分に切って分けるという発想は東洋にはありません。自然の体や生命から離れたシステム、それがいかに今の文明、軍事力や経済力を保ってきたか。ミサイルの弾道を計算するコンピュータやインターネットがいかに人間の身体から遠く離れたものか、それによって築き上げている今の世界の文明とはなんなのか。それを考えずに文化を語ると、文化は軍事力や経済力を援助する力になってしまうのです。

一方、身体から、自然から離れていないのが東洋の文化なんです。ノエル・ペリンの著書『鉄砲を捨てた日本』にもありますが、戦国時代、種子島に入ったたった2丁の鉄砲がわずかな年数で波及し、織田信長は3000丁の鉄砲で武田信玄の軍勢を全滅させます。それだけ鉄砲の威力を知り、つくる技術を持ちながら江戸幕府は鉄砲を一斉に捨て去るのです。鉄砲には身体性がないからです。手の延長線上にある刀で対面して闘う、刀は武士の魂であると。西洋人にとってこれは非常に奇異に感じるでしょう。日本人が再び鉄砲を使うのは、明治維新のときです。今でも日本人は手に持たない抽象的なものは苦手です。

それでは弓矢の文明はどうでしょう。それは不確実性を伴います。森鴎外の『雁』の一文を見ましょう。

「雁に石を投げて打ち当てると石原は言うので、岡田はかわいそうだから逃がしてやると言って、雁に当たらぬように石を投げる。ところが案に相違して石は当たり雁は死ぬ」。これは投げるという行為によって、自分の心や世界とは全然違った結果を生んでしまうということを示しています。その収拾をつけるためには、合理性や技術などを得なければならない。だから人間のつくりだした文明はみんな、その思いつきとは関係なく一人歩きをする。だからさらにそれに歯止めをかけるための装置、すなわち科学や文化が必要だったのです。

外に向かう文化と引き寄せる文化

日本における身体性のある文化のもうひとつの大きな特徴に「引き寄せ文化」があります。遠くにあるものを引っ張ってきて自分の体にくっつける。出雲国の神話「国引き神話」では、国が狭いので他の国の余った土地を引いてきて足そうとする。征服に行かずに引っ張ってくる。これは日本独特の考え方です。

神道と仏教の違いを一言で表した「神は来るもの、仏は行くもの」という言葉があります。仏教は仏様を拝んで西方浄土の極楽へ行くもの、しかし日本の神様はお祈りすると神が降りてくる。韓国ではシャーマンは踊って空に登り自分で神様のところに行こうするのですが、日本は違います。天から下っていただく。ご神体が山に降りるとそれを引っ張ってきて宮をつくり、さらに里にも宮をつくり、御輿をつくって村全体に連れて行く。また家の中まで引っ張ってきて神棚をつくり、それでも満足せずお守り袋を身につけるのです。綱引きもそうです。日本では今でも盛んです。韓国にはありません。集団の力をひとつに合わせる。逆に身体性のない投げる文化は個人の力ですから個性的になる。

日本にはもちろん、投げる文化と引き寄せる文化の二つの文化がありますが、歴史のなかで見ると力を合わせて引き寄せる文化が多い。このように外に向かって拡大していくものと、自分の身に外から引き寄せてくる2つのダイナミックなベクトルによって、全然違った文化が現れてくるのです。

花はデジタル文化を超える

昨年、『ガラパゴス化する日本』という本が話題になりました。日本はいかにガラパゴス化から脱出するのか、その対応策はあるのでしょうか。また昨年はアップル社のCEO、スティーブ・ジョブズが開発したアイパッドでコンピュータの世界に第三の波が押し寄せました。そこにツィッター、フェイスブックも加わり情報社会というものがさらに身近なものになっていく。ジョブズはアイパッドによって身体とコンピュータを隔てるキーボードをなくし、触れるという身体性を持たせたのです。そうするとどこででも自分の体を使って発信できます。ジョブズは西洋人としてはとても珍しく、彼のような考え方の人間は本来、東洋で現れてくるタイプなのです。日本や韓国は半導体をはじめ情報のハードウェアをすべて持ちながら、コンテンツ、ソフトウェア、インターフェイスではすべて西洋に負けている。どうしてスティーブ・ジョブズのような人が韓国や日本から出ないのでしょうか。

梅と桜の花を例にとると、万葉集では大陸の文化が日本にやって来て萩や梅の花が数多く詠まれました。それが新古今集になると桜が台頭してきます。国学、つまり日本的なものになると桜が出てくる。日本では花は文化なのです。ところが人間と花は本来関係がない。人間は蜂や蝶ではないからです。それでも花を愛でる、詠む。これが純粋な文化の在り方なのです。そうして日本がつくった花の文化は、梅から桜へ、大陸の文化を引き寄せ日本独特の文化へと変えていくのです。江戸時代後期の

書家、二川相近は「花より明くるみ吉野の 春の曙見わたせば もろこし人も高麗人も 大和心になりぬべし 」と詠みました。中国人も韓国人も吉野の桜を見ればみんな大和心になるだろうと自慢しています。

また、美しい桜は日本の心だといったのに戦争になると花と散れ、潔く死ねという軍国主義のシンボルとして現れる。いかに文化とは恐ろしく、でっちあげられやすいものか。文化の力をどこに、どう使うかによって世界はすぐに変わります。本居宣長は日本の文化を清く明るい心と定義しました。特に大陸からきた儒教や仏教にはない日本だけの美しく純粋な心だというのです。しかしそれが別の解釈をもったとき、ガラパゴス化する日本が現れるわけです。現代における新しい文化をつくるパラダイムがないと日本はますます引き寄せ文化に詰まってガラパゴス化してしまいます。

生命力となって人を幸せにする文化

韓国は半島であり、2000年の歴史のなかには占領された時期もあり、踏みにじられても生きようとする生命力を培ってきました。それが、まさに弱さから生まれた韓国の文化の強さです。文化力から生命力に向かっていく。これを民族共同体、アジア共同体ではなく生命共同体と読めば、日本、中国、韓国はおろか全ての生きとし生けるものが共同体として生きる、自分の生まれた土地を愛する、生命力を愛し新しいものに向かっていくというトポフィリア、バイオフィリア、ネオフィリアの考えになります。この3つのベクトルが今、新しい文化をつくっていくのです。

物理的力や物質を基にした産業資本主義、金融資本主義のパラダイムに代わる生命資本主義。ひとつの文明の大きな流れのなかで日本、中国、韓国の文化力を見るとき、文化がいかに生命力となって人間を幸せにするのかという「生命資本主義」の発信が、東アジア、特に日本、韓国から生まれてくるのです。

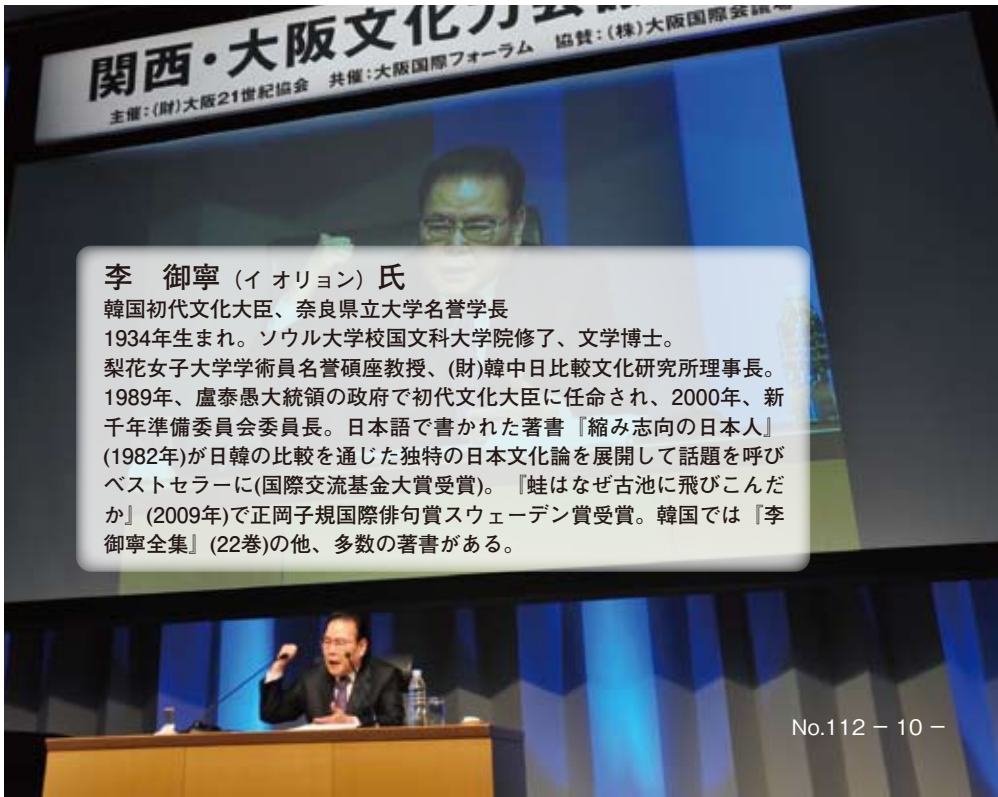
投げる文化と引き寄せの文化を対立として取り上げてきたのを、今からは融合した形に変える。デジタルとアナログの文化をひとつにした デジログ(digilog)型の文化がアジアから発信される時代になったのです。身体性をもつものへ。インターネットも身体性をもつものにすることが重要です。いかに今のサイバー世界を変えていくか。私は韓日ワールドカップの開催当時、17か国の言語を携帯電話を利用してリアルタイムに同時通訳を可能にしたbbbという通信システムを作りました。外国語を話す3,000名の専門家からなるボランティアを集めて携帯電話のネットを利用し、デジログの技術をいかしたものです。新千年準備委員会委員長だった私は、その前から投げ型のデジタル技術と引き寄せ型のアナログ身体性を融合した文化を創り、20世紀から21世紀に変わる瞬間、生まれたばかりの赤ん坊の泣き声を世界中に中継しました。韓国は新しい1000年を生命の声から迎えたのです。これがアジア人の心です。

浪花の文化と生命の文化の融合

大阪は商人、町人の社会です。江戸の武家社会、京都の公家社会の建前の文化とは味が違う人間のリアリティがある。日本人は仕事ばかりするといわれますが、仕事をする者は飽きない。それこそ仕事を楽しむ、仕事自体がおもしろいのだと。“商いは飽きない”という素晴らしい言葉を作った特異な文化をもったトポスが今の大阪です。大阪は仕事に遊び心がある、そこが素晴らしい。お金を儲ける、しかし儲けるだけではない精神を大切にしてほしいと。そういう浪花の文化と知識から知恵に移っていくソフトパワーを抱き合わせると、デジタルとアナログが融合した新しい生命力をはらんだ素晴らしい文化か生まれるのではないかと私は思っています。

韓国の投げ型の文化と日本の引き寄せ文化がひとつの輪を作ると、日本はガラパゴス日本列島からもっと広い生命共同体に向かって胸を開くでしょう。

今、地球がおびえている気候の変化、マネーの金融危機、暴力に変わっていく文明の衝突、そして トランスメディアのデジタル文明のビッグバン。日本だけがこのような生命の脅威から自由だとはいえません。大阪の経済の停滞から抜け出る穴として、文化の力を借りる心からは本当の文化は生まれてこない。襲って来る危機に向かい石を拾って投げた最初の猿になることによって、我らは最も人間的な生命の文化を手にすることが可能になると思います。それから今までなかった新しいビジネスモデルが現れ、大阪が最も幸せな繁栄の都市に創られると私は確信しています。ご静聴ありがとうございました。



李　御寧（イ オリョン）**氏**
韓国初代文化大臣、奈良県立大学名誉学長
1934年生まれ。ソウル大学校国文科大学院修了、文学博士。
梨花女子大学学術員名誉碩座教授、(財)韓中日比較文化研究所理事長。
1989年、盧泰愚大統領の政府で初代文化大臣に任命され、2000年、新千年準備委員会委員長。日本語で書かれた著書『縮み志向の日本人』(1982年)が日韓の比較を通じた独特の日本文化論を展開して話題を呼びベストセラーに(国際交流基金大賞受賞)。『蛙はなぜ古池に飛びこんだか』(2009年)で正岡子規国際俳句賞スウェーデン賞受賞。韓国では『李御寧全集』(22巻)の他、多数の著書がある。

優れたアーティストをバックアップ

関西・大阪文化力会議―記念公演―

関西・大阪文化力会議2011では、開会前（プロローグ）と閉会前（エピローグ）に、平成22年度大阪文化祭奨励賞受賞者による記念公演が行われた。大阪文化祭賞の主催者に加わる大阪21世紀協会は、同賞受賞者にこうした発表の機会を設けることで、優れたアーティストの存在を広く知らせるとともに、その活動や大阪文化祭を広くアピールしている。今回は関西歌劇団によるオペラ「フィガロの結婚」の一部と、関西フィルハーモニー管弦楽団による演奏「モーツァルト：セレナード第13番・アイネクライネナハトムジーク」が披露され、400人の来場者が聴き入った。

フィガロの結婚

関西歌劇団

1949年指揮者 朝比奈 隆氏を中心に関西の声楽家たちにより発足。年1回グランドオペラ中心の定期公演をはじめ、数多くの公演を行っている。「お蝶夫人」や「夕鶴」、田辺聖子台本の「源氏物語」など邦人作品にも取り組み、日本のオペラ振興に力を入れている。2003年文化庁芸術祭優秀賞をはじめ受賞多数。

河邉敦子
（伯爵夫人役／ソプラノ）

髙木ひとみ
（スザンナ役／ソプラノ）

富永奏司
（フィガロ役／バリトン）

佐藤明子（ピアノ伴奏）

アイネクライネナハトムジーク

関西フィルハーモニー管弦楽団

1970年ヴィエール室内合奏団として発足。2003年にNPO法人となり、井上礼之氏（ダイキン工業株式会社代表取締役会長兼CEO）を理事長として、関西を代表するオーケストラのひとつとして活動。2007年藤岡幸夫氏が首席指揮者、2011年世界的バイオリニストであるオーギュスタン・デュメイ氏が音楽監督に就任。

写真左より、友永健二（第1ヴァイオリン）、今川さゆり（第2ヴァイオリン）、飛田千寿子（ヴィオラ）、大町 剛（チェロ）

冷戦構造　情報通信革命　グローバル化　里山　渋沢栄一　論語と算盤　福沢諭吉　きつねうどん　神農さん　道修町　漢字文化圏　上海　長江　遣唐使　杜甫　李白　漢字革命　ジャパンアズナンバーワン　縮み志向の日本人　アジア文化圏の時代　君よ憤怒の河を渡れ　キリスト教文化圏　国交正常化　戦争　経済開放政策　清国　神社　尖閣諸島　GDP　インターネット　グローバル　コモンズ　出汁文化　孫悟空　三国志演義　金融危機　戦構造　情報通信革命

文明・文化のグローバル化や世界規模の情報通信網によって、各国の多様な文化が交錯するいま、日本を含む東アジア諸国は、互いの文化力をどう交流し、いかに相互理解と安定につなげていけるのか。第一分科会では、東アジア文化の特徴とその強みを探りつつ、東アジアの文化戦略における今後の日本の立場と役割について、さまざまな意見が出された。

東アジアとともに進む
日本の文化戦略を探る

エズラ・ヴォーゲル氏
（ハーバード大学名誉教授）

佐々木幹郎氏
（詩人）

佐藤茂雄氏
（大阪商工会議所 会頭/京阪電気鉄道代表取締役CEO）

王　敏氏
（法政大学教授）

コーディネーター
萩尾千里氏
（大阪国際会議場社長）

アジア文化の特徴と弱点

萩尾　近年、世界的に文化と文明の関係が非常に大きな問題になってきています。急速にグローバル化が進み、同時に文明の多様化も進むことから、どんどん世界が広がっていっています。それは国と国、人と人との交流を促進するというメリットもありますが、同時に、交流によってもたらされる異質なもの、それによる摩擦、あるいは価値観の違いというものも受け入れなくてはならなくなってきました。また、米ソの冷戦構造が氷解し、イデオロギー対立も沈静化しました。その上、交通および情報通信革命により、国の垣根が低くなってさまざまな文化が流入する、まさに文明の液状化現象が起こっているといえるでしょう。だからこそ、世界が大きく変わろうとしている今の時代に、文明に対する考え方をきちんと認識しなければ、混乱が起きるんじゃないかと考えます。その根底となる文化を我々はどのように理解し、どのように活かしていくのか。それを第一のテーマとして議論したいと思います。国や地域、そして関西にとって、文化力は何を意味するのか。アジアの共通文化の特色と弱点とは。そういうことを含めてご発言いただきたいと思います。

佐藤　文化の大切さはよく分かるのですが、我々はまず先に自国の文化の見直しと構築から始めるべきではないかと思います。いま日本では、地方が荒廃し、里山の文化が失われつつあります。そんな中、日本人のアイデンティティとして保ってきた文化は、どういうもので、それがどう廃れてきているのか。それをきちんと整理し直すことが問われていると思います。弊社（京阪電鉄）の創立者・渋沢栄一の起業哲学を記した著書『論語と算盤』には、開国を迎えた明治という時代に、どうやって西洋に立ち向かっていくか、今後の展開をどのように国論にまとめたかなどが書かれています。まさに現代の日本が閉塞感の中で行き場を失うなか、どうすればそれを打開できるのかといった指針が示されているようで、今の人々が本書に救いを求めているようにも思えます。そこで私は、こういった渋沢栄一や福沢諭吉などの考え方が、振興著しい東南アジアの国々でも通用するのかどうか、大変興味を持っております。もしその考えが通用するならば、日本は先に勃興した立場として、東南アジアの国々に過去の経験をご指導することができ、それをきっかけとして、価値観の共有化や異なる価値観をお互いに認め合うことができるのではと思います。

ポン酢的な役割を担う文化

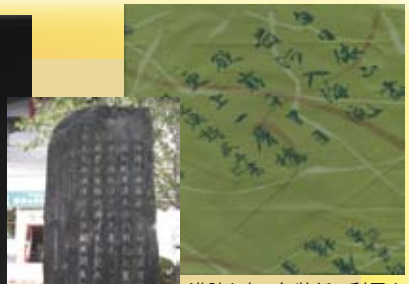
王　今の時代に文化とは何かをわかりやすく解説するならば、“日本のポン酢のような役割”だと思います。ポン酢は和食はもちろん、西洋料理や中華にも合い、どんなものともコンビになることが可能ですね。この文化というよき協力者を媒介にして、相互の理解が深まるわけです。例えば、大阪で事例を挙げますと、“食＋文化”のコンビ。大阪発祥の食べ物にきつねうどんがありますが、じつは中国や韓国の人は来日し、この料理を見ると、「日本は狐も食べるのか」と大変驚きます。それをきっかけに、日本における狐の存在を通して、日本への興味が深まるわけです。例えば、日本で狐は農業の神様であり、また日本には狐を描いた童話が数多くあるなど、狐は昔から子どもの友達です。最初にきつねうどんが刺激剤となり、日本の文化への興味や知識が深まり、そして日本への観光、留学、ビジネスへと発展するという効果が考えられます。

二つ目の事例は、“名字＋文化”。日中韓の名字に共通して“姜”がありますが、この名字は日本では神農さんという神様を表すものとして親しまれています。また、大阪道修町の少彦名神社の神農祭、東京湯島天神の神農祭と祭りも数々行われることで、これを訪れてみたいという経済効果へと繋がっていきます。これらから考えると、文化と何かをコンビにすれば、品格をもってより早く、よりソフトに経済効果などの目的に達成することができます。文化政策とは、こうした考え方で取り組むものだと思います。

縦書きから紐解く東アジア文化

佐々木　東アジアの文化を問題にした場合、一番に共通する文化は一体何なのか。私は文字を用いて詩を書く人間なので、非常に単純に考えますと、第一に漢字文化圏であることだと思います。漢字はすべて中国からもたらされました。私が初めて上海に行った時、大阪港から瀬戸内海を通り、東シナ海を通過して、長江の河口にたどり着き、上海に入りました。海と見まごうほどの長江の大きさとそこから流

王　敏氏



漢詩を店の包装紙に利用するといった日本の和魂漢才の知恵とアイデアは、今後の文化政策のヒントに。

「文化」は、食など何かとコンビにすることで、お互いの国を理解するための理解や興味が促進される。

漢字に関係する本がベストセラーになるなど、日本は東アジア漢字文化圏のリーダーでもあり、その影響が中国にも及んでいる。

れてくる土砂の多さ、その土砂によって真っ茶色に染まる海の色など、その光景は日本という小さな島国に住んでいた人間が初めて見た雄大な大陸の姿でした。このルートはかつて遣唐使たちが通過したのと同じで、遣唐使たちが見聞きし、体験したであろう思いを自分に重ね合わせながら大陸に近づいていった時に、この土砂の一粒一粒と同じように、大陸から文字も一粒ずつ運ばれてきたのだという感触を受けました。このような海路を通じて漢字は日本に届き、朝鮮半島やベトナムには陸路を通じて届いたのでしょう。そんな風に中国の漢字文化が周辺の国々に円周を描くように伝わり、その漢字がもたらした威力というのは1300年以上ずっと続いているわけです。しかし、ここ40年余りの間に漢字文化には大きな変動が起こっています。じつは漢字を作り出した中国では、表記がすべて横書きになっています。新聞も本も杜甫や李白の詩さえすべて横書きです。そして、韓国はハングル中心ですが、ここでも横書き、台湾は横書きと縦書きが半々になっています。横書きは情報が多く入り、早く読めるというメリットがありますが、同時に読み飛ばしが多くなる。けれど、縦書きは、目の周りの筋肉をしっかり動かし、文脈をきちんと押さえながらでしか読み取ることができない。だから日本では教科書や裁判所の判例など、大事な文章は今でも縦書きなのです。日本の縦書き文化とは、もともと中国が作り出した文化に、後々ひらがなやカタカナを発明したことで、縦書きを東アジアで唯一優先した文化なのです。中国や韓国などは同じ漢字文化圏でありながら、この表記の変化によって同じ文章でも意味が違うように見えてきます。かつて同じように受け止めていた杜甫や李白の詩でさえ、今では別のニュアンスで読み取る時代になってきています。つまり、異文化理解のヒントは、このような微細な問題の中に大きな理解の糸口が隠されているように思えます。

エズラ・ヴォーゲル氏

佐々木幹郎氏

漢字を各国の文化政策に

萩尾　佐々木さんから漢字文化圏の話題が出ましたが、他にご意見のある方はおられますか？

王　漢字文化圏に関していえば、大陸で失われつつある旧漢字の在り方や形態が、日本は今も活性化された状態で現在の生活の中に見ることができます。例えば、漢詩が書かれているお菓子の包装紙です。この発想とアイデアは世界のどこを探してもなく、じつに感激すべきものです。また、2009年の日本のベストセラーは、『読めそうで読めない間違いやすい漢字』で、漢字検定にいたっては、2008年には英検を越え、289万人が受験しました。そして、日本は中国に漢字を学んだだけで終わらず新たに生産し、今では逆に中国は日本製の造語漢字1000語以上を使用するなど、特に若者主導で漢字革命が起こっています。さらに驚きの調査があります。中国の小学校で学ぶ漢字を調べたところ、約82％が日本語検定試験に含まれている漢字に合致しており、つまり、お互いに言葉が話せなくても、漢字を通して交流することができるのです。世界の母語人口のデータをみると、英語よりも中国語の人口の方が多いこともあるので、漢字をきっかけに言語を越えて相互理解の文化政策を考えてみるのは面白いと思います。

ヴォーゲル　学者の目から各国の文化を見る場合、主に二つの意味を考えます。一つは社会全体の考え方であり、もう一つは音楽や詩など。我々は文化政策を考えた場合、お互いの国を理解するために、お互いがどういう関係なのか、どういうことを一番大事にすべきか、そのためにはどういう考え方があるのかを、もっと深く尊重し合って考えなくてはなりません。まずは全体を見渡し、その後、自分の生活や経験を踏まえて、根本的な考え方を互いに理解すべきだと思います。

外交が内向き傾向にある日本

王　日本が文化政策を行う上で、ぜひ参考にしていただきたい三冊の本があります。それは、エズラ・ヴォーゲル氏の『ジャパン・アズ・ナンバーワン』、李御寧氏の『縮み志向の日本人』、レオン・ヴァンデルメールシュ氏の『アジア文化圏の時代』。ここには見事な文化政策の指摘やヒント、提案が書かれています。三氏は日本への深い愛情を抱きつつ、日本に対し、自己認識と他者認識が重要であると指摘されています。それは、日本は時に内向き傾向になりがちだが、アジア発展の筆頭であるという自覚を持ってほしいということです。日本は16世紀を区切りにして、精神遍歴と体験が分断されがちになったのではないでしょうか。16世紀までの日本は、アジア共同体への自発的な模索を始めた先行者でした。しかし、16世紀から現在に至るまでの日本は欧米価値基準に転換したことで、再度アジアに目を向けようとしても、

欧米価値基準に並ぶもう一本の基軸をうまく立てにくい状態になっていると思います。

萩尾　本日は会場に女優の中野良子さんがお見えです。中野さんは文化大革命後、中国で初めて上映された外国映画として大ヒットした『君よ憤怒の河を渉れ』に出演されたことで、中国でも国民的人気のある女優さんです。中国や世界の国々と日本との交流についてのお話しをしていただければと思います。

目に見えない文化力のパワー

中野　私はこの映画を機に、長年にわたり、中国をはじめ世界の国々と国際交流活動を行ってきました。最近驚いたのは、ある中国関係者との覚え書きの中に、「たとえ不可抗力な事態（自然災害や政府行為など）が発生し、事業の継続が困難になりそうな場合でも、真摯な協議を行い協力し合う」という文言があったことです。今まで32年間交流していますが、こういった文言はあまりありませんでした。中国もたくさん国際交流を行うことで、政府は政府、民間は民間そして必要な時は国も民間も協力し合うといった考え方が生まれているんですね。私が考えるに、文化力とは何か？といえば、生命力であり、生きている証そのものだと思います。相異が多く、また複雑な日中間を行き来していると、中国という国に対して、どう対応してよいか分からず戸惑いを感じたり、また想像を超えた素晴らしい出来事に遭遇するなど言葉に表せないほどカルチャーショックの連続でした。今でもそれは続いています。そんな中、気持ちを癒してくれるのも同じ中国で生まれた歌という文化でした。文化力は技術力と比べると、その影響力を数値で測ることはできません。しかし、目に見えねども文化力は国と国、人と人とを繋ぐパワーがあると私は実感します。

中野良子氏

中国は今後どう変化するのか

萩尾　アジアは近年、成長センターとして世界から注目を浴びていますが、この地域はキリスト教文化圏に比べ、文化の多様性から相互理解が非常にしにくいと思います。そして、日本にとってのアジアといえば、ずばり中国と韓国といえるでしょう。ここ数年を見ていると、韓国とは非常にいい感じになってきており、違和感がないぐらいに理解が深まってきています。しかし、それに反比例にして、中国との関係がだんだん悪くなっており、日本も韓国も今後の中国の動向に恐怖感を持っているのは間違いありません。そこで第二のテーマとして、中国は今後どういう風にソフトランディングしていくのか？まずは王さんに口火を切っていただきたいと思います。

王　近年、中国の政治や経済、そして文化が変わりました。その中で、何より民衆の力がついたという、今までなかった方向に展開していることをまずは注目していただきたいと思います。つまり、中国人一人一人が教育を受ける機会が増え、グローバル化の風が吹いたことでより加速し、さらに情報革命の産物でもあるパソコンの普及によって、一人一人の内面で変化が起こったということです。今まで日中間の相互理解は、政府を窓口にし、政府の主要な代弁者に頼っていましたが、今では民衆間の対話、民衆間の相互認識が重要になっています。しかし、民衆間の相互認識として、中国と日本は互いの情報が入ってこない三つのブランク期間があったことを認識していただきたい。一つめは1931～1945年の戦争時期、二つ目が冷戦時代、三つ目が国交正常化以降です。このような期間を経て、1978年の経済開放政策後に一般国民にも情報が開放されたのですが、その時初めて出会った中国人と日本人は、今まで襖を介して挨拶していたような関係から、一気にその襖が吹き飛び、そして隣の国を見てみたら、驚くほど生活レベルが違っていた。なんと、中国人と日本人の生活は各方面から見て、約30年の格差があったのです。一人一人の人間にとって生活が違えば、価値基準の考え方や思考も変化が起こります。つまり同一性よりも異質性の方が大きかったのです。

日本と中国の相互認識の違い

王　また、日本と中国の相互認識のパターンが４つあることが分かりました。一つめは「古代と古典へのこだわり」。日本にとって初めて出会った中国人は古典の国の中の人というイメージでした。また、中国人にとっての日本は、近代化以降の平和建設に貢献してきたイメージは少なく、むしろ中国から学んだ国というイメージがあり、お互いに認識の差があったと思います。二つめが体験型による「戦争による記憶」。三つめが政治型による「冷戦構築による概念」。両国が同時に経験した冷戦時代は敵対関係でしたので、その関係に基づく思考が今も続いていたり、もしくは瞬間的にそう考え

てしまう思考パターンが今もあると考えられます。四つめは利害型による「経済関係による選択」。経済交流による拝金主義の影響から、すべて金銭で選択するという考え方です。交流が分断されていた時期があったために、この４つのパターンで互いを認識するのも仕方ありませんでしたが、2000年以降から大きく変化してきていると思います。

萩尾　それはどう変化してきたのですか。

王　不特定多数の人が日中関係に関

わり、ストレートに交流することで、まず生活がボーダーレス化しました。そうすると、先にあった４つの相互認識パターンが多様化し、「寿司は好きだが、靖国神社参拝は嫌い」「餃子は好きだが、中国の尖閣諸島問題はむかつく」など、一人一人の相互認識が分化され変化してきました。特にその傾向は若い世代に顕著ですね。そういったことを踏まえて日本に認識してほしいのは、中国では2000年から異文化理解、異文化交流を大学教育の必修科目に取り入れるなど、積極的に異文化を理解させる教育を行っています。日本はアジアの国をGDPではかる傾向がありますが、それは一つの尺度にすぎません。経済力に文化力を合わせてその国をはかり、そして付き合う。それが今後はますます必要になってくると思います。

アジアとの付き合い方

萩尾　王さんからは、とても建設的なご意見をいただきました。インターネットもなかった時代に比べれば、今は本当に大きく変化してきています。だから、いつまでも政府代表だけに任せるのではなく、時代の変化に合わせ、積極的に文化の相互理解を行うことが大切なんだと思います。そして今、日本は非常に中国を意識しています。なぜ意識しているかといえば、中国と付き合うことは今後の発展も鑑みてもメリットが大きい代わりに、何か問題が起これば軍事力を行使するのではないかという懸念もあるからです。それを踏まえ、これから中国とどのようにすればうまく付き合えるかご提案はありますか。

佐藤　中国問題で一番懸念されることは、グローバル・コモンズのリスクが増していることです。これは今までなかったことなので、それをどう解決するかは中国以外の国々と一体になって考える努力をすべきだと思います。政府間の問題になると難しくなりますので、まずは民の力で模索するべきだと思いますが、先に話に出た漢字がキーワードになるかといえば、僕はならないとみています。漢字で友好を促進するのは不可能だと思いますね。それ以外で考えるとすれば、料理や食はどうでしょう。味わいについての感覚は共通ですし、例えば、大阪のダシ文化と中国の麺文化を一緒になって

佐藤茂雄氏

作ってみるのはどうか。また、映画製作を日中友好の架け橋にするなど、民の力で中国と親しく付き合える関係を構築するのはぜひとも行っていきたいと思います。

萩尾　王さんはこの意見に何か反論は?

王　漢字を切り口に交流することに懸念を感じられるのはよく分かりますが、じつは日本人は漢字を使うだけでなく、漢字を記号として日常生活に取り入れているんですね。例えば、日本のレストランには“孫悟空”があり、高校のクラブ活動では三国志演義を上演している。これは世界のどこにも見られず、日本でのみ見られる現象なのです。この和魂漢才ともいえる漢字の取り入れ方は日本人が西洋化を成功したベースにもなっており、今でも意識の深層にあると思います。私は漢字を共有した生活や信仰、習慣、意識の普遍性を、日本発信によって東アジアでもう一度再認識する必要があるのではないかと思っております。

萩尾　漢字を媒介としてお互いの文化を研究することで、互いの文化の相違がよく見えてくると思います。そういう意味では漢字文化を漢字文化圏で研究するのは面白いですね。

アイデンティティの確立を優先

王　韓国でも2002年に小学校教育で漢字の勉強をするよう呼びかけています。それは中国と仲良くするため、または中国の古典が有用であるという判断からだと思います。日本は中国の漢字が有用であれば、それを取り入れ、英語が有用であれば、また同じように取り入れてきました。それは大事なことですが、根本には日本人としてのアイデンティティがしっかりとあることが大切なんです。それを記号にして最初に表現でき、打ち出せるのはじつは漢字なんです。それは、日本の歴史や文化を伝承させ、日本語を継続させるため、その付加価値として、今、東アジアと仲良く交流するための記号にもなると思います。

ヴォーゲル　中国と日本の関係を述べれば、ここ100年ぐらいは技術も経済も日本が勝っていると思いますね。

しかし、中国は古く大きい国なので、本来は日本よりも上にいるはずだというプライドもあり、また、戦争問題など国家間の問題もあることで、それに固執して議論を繰り返しても何も解決しません。しかし、現代は金融危機や地震、テロなど、共通の問題も増えてきていることもあり、問題に応じて協力し合うのは非常に大切なことだと思います。

本当の国際交流とは

佐々木　先ほどの話で出ました、国力をはかるのはGDPではなく多様性だという話はもっともだと思います。その多様性をどこで判断するかといえば、結局は一人一人の人間にかかっています。王さんもヴォーゲルさんもいわれるように、中国においても韓国においても民と民との対話、つまり本当の国際交流とは、古今東西、一対一の人間関係だと思います。政治が変わっても、個人個人の人間関係がきちんと築かれていれば、その信頼度によって多面的な交流が生まれ、どんなにメディアが反日感情を煽ったとしても、自分が信頼するあの人はきっと違う感情を持ってくれていると考えることができるでしょう。そういう環境を一個人が作ろうと思えば可能であると思う。僕はそれが本当の国際交流だと思います。

日本の立場と役割を再認識

王　日本は漢字を媒介にした国の中で、世界で唯一成功した国だと思います。漢字を発明した中国でも成功できなかった部分で、日本は進化し、成功しました。このことに対して自覚をしていただきたい。日本がこのことを自覚すれば、世界文化の再生を担うことができます。日本は文化力があり、経済力もあります。ですから、これからのアジアの平和と日本自身のさらなる発展のために、もう一度その役割を考えてほしいと思います。日本がさらなる発展を目指して、東アジアの国家間の対策拠点となって先行者であってほしいですね。

もず唱平氏

知的財産権で成り立つ文化

萩尾　本日は会場に、中国との音楽交流を積極的に行っておられる作詞家のもず唱平さんがお越しです。突然ですが、もずさんに、そうした活動を通した思いなどをお伺いしたいと思います。

もず　歌謡曲などの大衆音楽の世界は、経済活動つまり知的財産権を無視しては考えられません。この点において中国は、失礼ながら音楽著作権を含め知的財産権についての考え方が非常に遅れていると思います。日本音楽著作権協会（JASRAC）と中国音楽著作権協会（MCSC）が共通に乗り入れる時代になったとき、この知的財産権を真剣に考えないと、アジア文化圏から欧米文化圏へと、著作権料を一方的に支払うばかりになってしまうでしょう。今回のパネリストの方々には、大衆文化はいつも知的財産権によって成立しているということを何かの機会にご教示いただければありがたく思います。

萩尾　文化交流は民間からであるというご意見には、まさに同感します。ぜひそれをさまざまな形で実践していくべきだと思います。本日は多くのご意見をいただき、誠にありがとうございました。

萩尾千里氏

エズラ・ヴォーゲル（ハーバード大学名誉教授）
※プロフィールはp6に掲載

佐々木幹郎（ささき みきろう／詩人）
1947年、奈良県で生まれ大阪で育つ。2002～07年東京藝術大学大学院音楽研究科音楽文芸非常勤講師。1970年、第1詩集『死者の鞭』を刊行後、詩集に現代詩文庫『佐々木幹郎詩集』、『蜂蜜採り』（高見順賞）、エッセイ・評論集に『中原中也』（サントリー学芸賞）、『アジア海道紀行―海は都市である』（読売文芸賞・随筆紀行賞）など多数。チベット・ネパール・中国などアジアの都市の比較文化論、テレビ出演など多数。中原中也賞、サントリー地域文化賞選考委員。

佐藤茂雄（さとう しげたか／大阪商工会議所　会頭／京阪電気鉄道代表取締役CEO）
1941年生まれ。1965年に京都大学法学部卒業。1995年京阪電気鉄道取締役、1999年同社常務取締役、2001年同社代表取締役社長、2007年同社代表取締役CEO取締役会議長に就任。現在、大阪商工会議所会頭を務める。

王　敏（ワン・ミン／法政大学教授）
1954年中国河北省承徳市生まれ。法政大学国際日本学研究所教授。大連外国語大学日本語学部卒業、四川外国語学院大学院修了。文化大革命後、大学教員から選出の国費留学生として宮城教育大学で学ぶ。専攻はアジアの文化関係、日中比較研究、日本研究、宮沢賢治研究。主な著書に、『日本と中国　相互誤解の構造』（中公新書）、『日中比較・生活文化考』（原人舎）、『中国人の愛国心―日本人とは違う5つの思考回路』（PHP新書）『謝々！ 宮沢賢治』（朝日新書）など。

萩尾千里（はぎお せんり／大阪国際会議場社長）
1937年熊本県生まれ。1960年関西大学商学部卒業、同年日刊工業新聞社入社。1969年朝日新聞社入社。1977年同社編集委員として経済を担当。1987年関西経済同友会常任幹事・事務局長、2006年大阪国際会議場取締役社長に就任。その他にも、復旦大学（上海）客員教授、大阪大学非常勤講師、関西サイエンスフォーラム専務理事などを務める。

金沢21世紀美術館　アートアベニュー　現代美術アー
テ・スト　東京一極集中　文化首都　はんなり　異界
の文化　祭礼の文化　ディズニーランド　天神祭
瀧御　神賑行事　ギャル神輿　御鳳輦　明治天皇　船
神前結婚　神道　ゆかしい　歴史遺産　五座　六寺
法善寺　ステーブ・ジョブズ　情報端末機　茶の
湯　千利休　近松門左衛門　小林一三　松下幸
之助　私立博物館　デジタルコンテン
ツ　梅田北ヒルズ　知的交流
拠点　やってみはれ
似伝統　ツ

東京一極集中によって関西の活力低下が懸念される今、関西がもつ文化力を向上し。
戦略的に発信する新たなアクションが求められている。
折しも平成23年度より、「文化首都年・はなやか関西」もスタートする。
第2分科会では、こうした状況のなか文化こそが経済や社会を活性化する
鍵であることを確認し、具体的な方策を討議した。

関西の文化力向上と戦略的発信

李 御寧氏
（大韓民国初代文化大臣）

千田 稔氏
（国際日本文化研究センター名誉教授、奈良県立図書情報館館長、
帝塚山大学特別客員教授）

高島幸次氏
（大阪大学招聘教授、大阪天満宮文化研究所研究員）

鳥井信吾氏
（関西経済同友会 常任幹事、歴史・文化委員会委員長、
サントリーホールディングス代表取締役副社長）

蓑 豊氏
（兵庫県立美術館 館長）

コーディネーター
堀井良殷氏
（大阪21世紀協会 理事長）

文化の旗振り役

堀井　第2分科会では、関西の文化力の向上と戦略的発信のために我々は何を考え、どのようなアクションを起すべきかについてお話しいただきます。蓑さんはサザビーズの副会長やシカゴ美術館の部長などを歴任され、外国の文化事情ついてもお詳しいと思いますが、そのご経験も含め、昨今の日本あるいは関西における文化への取り組み方についてのお考えをお聞かせください。

蓑　アメリカのインディアナポリスに、コロンバスという小さなまちがあります。そこにあるカミンズというディーゼルエンジン会社の社長が、自分たちのまちに優秀なエンジニアを集めようと、感性豊かなまちづくりを考えました。公共施設の設計料を同社が負担し、才能ある建築家たちの設計で学校や図書館、消防署、電話局などを建ててもらおうというものです。こうして個性ある建物がたくさん作られ、古いまちが近代建築の宝庫に一変しました。この活動は今でも続いており、コロンバスは観光地としても高い人気を得ています。また、私の仕事である美術に関していえば、オランダの美術館館長の言葉がとても印象に残っています。それは、「親に美術館に連れて行ってもらった経験のある人は、必ず自分の子どもを美術館に連れてくる。しかし、そうでない人は必ずといっていいほど自分の子どもを美術館には連れてこない」というものです。私が大阪市立美術館の館長をしていたときも同じことを感じ、まさにその言葉の通りだと思いました。だから金沢21世紀美術館の館長になるときには、「子どもと一緒に成長する美術館をつくりたい」と市長にもちかけました。日本では長と名のつく人が理解しないと文化施策も全然進みませんからね。そこで市長から「全面的に応援するから是非やってくれ」と励まされ、多くの人に美術館に来てもらえるようさまざまな仕掛けをつくりました。美術館のオープン（2004年）を知らせるために、現代美術アーティストのイチハラヒロコによるユニークなカウントダウンバナーを市街地に立てたり、美術館への道をパブリックアートのある「アートアベニュー」にしたり、さらには美術館所蔵の作品をペイントしたアートバスを仕立てたり、商店街の250店舗に「美術館をサポートします」というマークを掲示してもらうなど、町ぐるみで美術館のオープンを盛り立てました。一方、美術館では、子どもたちが触れて楽しめる作品や自由に遊べるスペースを設けたり、5,000万円をかけてバスをチャーターし、3か月間で4万人の小・中学生を美術館に招待するなど、子どもたちに美術館を体験させる機会を増やしました。また、金沢21世紀美術館ができたことで、年間150億から200億円もの経済効果があるといわれています。美術館がまちの活性化に大きな役割を果たしているんです。こうしたことは大阪でもやろうと思えば必ずできるはず。ただしそのためには、コロンバスや金沢市のように旗振り役が必要だと思います。

Fire Station No. 4

蓑 豊氏

金沢21世紀美術館の
開館カウントダウンボード

金沢21世紀美術館

はなやか関西

堀井　蓑さんには各地の事例をご紹介いただきましたが、やればできるし、必ず成果も出るはずですね。さて、関西にはもともと素晴らしい文化資源がたくさんあり、それらをつないで生かしていくべきで、まだまだすばらしい可能性が眠っていると思います。これについて千田さんのお考えをお聞かせください。

千田　「関西はひとつ」というと、「関西はひとつずつ」ではないかと皮肉られそうですね。京都や大阪、神戸などは、それぞれ個性があって良いという考え方です。私はそれも理解できますが、東京一極集中に対抗するためには、やはりまとまるほうが力を出せるのではないかと思います。外国では、2つのまちが互いにしのぎを削ってひとつの国を盛り立てている例が多いのに対し、日本では東京と関西という2つの都が文化的に機能しておらず、それが今日の関西の元気のなさにつながっているのではないかと考えます。関西、そして日本の活性化のためには、東京に対して関西という文化的な対立軸が必要なんですね。これを称

して「文化首都」といいます。平成23年度から国土交通省近畿地方整備局が「文化首都年プロジェクト」をスタートさせ、関西発信のさまざまなイベントを行います。東京は政治的な首都ですが、関西は日本を代表する文化的な首都であることを全国そして世界へ発信しようという事業です。また、私が参画している関西経済連合会の関西ブランド力向上研究会では、「はなやか関西」というキーワードで、関西がいかにまとまって力を出すかについて考えています。関西とりわけ畿内においては、古代に都がおかれ、政治・経済の中心地として雅びやかな文化を発祥させましたし、さまざまな歴史的文化があります。その意味で、関西の過去・現在・未来を「はなやか」という言葉で表現したわけです。ちなみに別の会合で、これを「はんなり関西」にしたらどうかという意見がありました。「はんなり」は京都ローカルな言葉です。文化首都というのは、そんなローカルな活動ではありません。また、昨年（2010年）、あるシンポジウムで関西経済界を代表する方から、「私たちが金を儲けたら、そのお流れで文化をやればいい」という発言がありました。儲かるまで文化はちょっと待っておけということです。しかもこの発言に拍手まで起きました。一体何を考えているんでしょうか。経済界でこんな考えがまかり通るなら、大阪はますます文化砂漠になるでしょう。先ほど蓑さんが素晴らしい美術館のお話をされましたが、こんな状態では実現するのは相当先になると思います。

神賑行事

堀井　おっしゃる通りで、この文化力会議もそうした危機感から始まったものです。さて大阪ですが、天神祭をはじめ上町台地には日本発祥以来のたくさんのお祭りがあります。その研究の第一人者である高島さんは、どのようにして大阪あるいは関西の魅力を発信すべきだとお考えでしょうか。

高島　日本人が魅力や憧れを感じるものに、「異界の文化」や「祭礼の文化」があります。異界の文化とは、金沢21世紀美術館やディズニーランドのような日常生活を忘れさせるようなもので、祭礼の文化とは、天神祭のように過去から現在までずっとつながってきている伝統行事です。毎年７月25日、天神祭の船渡御では100艘の船が1万人を乗せて大川を行き交い、川岸や橋の上には100万人の人出で賑わいます。こうした天神祭を含め、私は、すべての祭にはそれを賑わわせる特有の構造があると考えます。祭の中心には神職が行う「神事」があり、その周辺には神事を祝う氏子たちの「神賑行事」があるという重層構造ですね。ここで大事なのは、神事と神賑行事は完全に役割分担されていることです。守るべき伝統や作法は神職が神事として守ってくれるからこそ、氏子は安心して、天神祭に来る人たちに喜んでもらおうと「船渡御」や「ギャル神輿」といった神賑行事ができる。天神祭が100万人も集めるお祭りとして続いているのは、こうした役割分担があるからだと思います。また、天神祭は古い歴史を感じさせますが、じつは全てが古いわけではありません。例えば神様の乗り物である御鳳輦（ごほうれん）を担ぐ人たちの講は、明治９年頃にできました。氏子たちが、明治天皇が御鳳輦に乗られているのを見て思いついたんですね。このように、伝統は変え続けることによって残されるんです。ところで本日ご参加の皆さんは、日本で最初に行われた神前結婚式はいつだったかご存知ですか。じつは明治33年で、大正天皇が最初です。それまでは仏式でした。ちなみにサントリーさんが創業されたのはいつですか？

鳥井　明治32年です。

高島　面白いことに、神前結婚とサントリーという会社は同時期に始まったんですね。ところがサントリーはそれまで日本になかった洋酒を世に出したので新しく思え、神前結婚は神道という伝統文化が背景にあるから、ずっと古くからあるように思える。「古式ゆかしく」という言葉がありますが、

高島幸次氏

この「ゆかしい」には、「懐かしく感じられる」という意味があります。ここで私が言いたいのは、日本人にとっては、本当に古いだけではなく、「古く見えること」も魅力だということです。だから大阪や関西の魅力を発信するためには、伝統的に見せる仕掛けも必要だと思います。さらに、もうひとつの魅力である「異界の文化」とうまく役割分担できれば、それなりの効果が期待できるのではないかと思います。

プロデュース機能

堀井　先ほどは千田さんから「大阪の経済界は何を考えているんだ」というお話がありましたが、私は千田さんがお考えほど、感性のない経済人ばかりではないように思います。例えば関西経済同友会では、歴史・文化委員会というのをつくって活動されていますね。その委員長である鳥井さんは、大阪の活力向上に歴史と文化をどのように生かすべきだとお考えでしょうか。

鳥井　大阪には歴史遺産である神社仏閣がたくさんあり、それらを生かすことがまちの活性化には重要だと思います。ミナミで「トリイホール」という劇場を運営している鳥居学さんは、「ミナミを復活させるには、お寺の復活が大事。神社仏閣があってこそ人が集まり、文化が生まれる」とおっしゃっています。私もそれには同感です。かつてミナミには五座（戎座、中座、南座、朝日座、弁天座）と呼ばれる劇場があり、その周囲には六寺（法善寺、竹林寺、自安寺、大見寺、六坊、法祐寺）と呼ばれる寺院がありました。今は松竹座と法善寺だけになってしまいましたが、その一部でも復活させることで、ミナミの再生につながっていくのではないかと思っています。ところで、近年の日本経済全体を見ると、液晶テレビやDVDプレーヤー、カーナビといった日本のお家芸ともいえるエレクトロニクス産業が、1997～98年をピークに世界シェアを落としています。その原因は世界不況や円高、少子高齢化などさまざまに言われておりますが、私は、そうしたハード技術を組み合わせて新たなものを生み出すデザイン力や構成力が弱まってきているからではないかと考えています。例えば、スティーブ・ジョブズ氏率いる米国アップル社のiPadやiPodという情報端末機が世界に衝撃を与えましたが、注目すべきはそのハードウエアではなく、操作性やコンテンツを生み出すデザイン力や構成力です。この分野において、アメリカにやられっぱなしという感じがします。かつて大阪・関西には、茶室や茶碗、庭、掛け軸といったハードを巧みに構成して「茶の湯」というソフトを構築した千利休がいましたし、日本のシェークスピアと呼ばれる近松門左衛門がいました。近年は、小林一三や松下幸之助のように、伝統的な芸術や芸能を理解し、文化創造に寄与せんとした先鋭的な起業家も多くいました。そうした文化力をもう一度大阪に復活させることができればと思います。そのためには、大阪の人々が「文化が切り札であり、最後の砦である」という思いをひとつにする必要があると考えます。そうしなければ文化力を向上する方向性はいつまでたってもバラバラなままでしょう。大阪には、関西経済連合会、大阪商工会議所、関西経済同友会という３つの大きな経済団体がありますが、同様に文化をプロデュースする団体があってもいいのでは、と思います。ですから、このバラバラに見える大阪人のパワーと個性を合わせるプロデューサー役として、大阪21世紀協会の活躍に期待しています。

鳥井信吾氏

生きていることが文化

堀井　がんばらなくてはいけませんね。さて、李御寧さんは日本や韓国での文化力向上への取り組みについて、どのようにお考えでしょうか。

李　韓国の初代文化大臣に就任したとき、ロシアの記者から「文化省をつくった目的は何ですか」と質問されたことがありました。そこで私は、「９年後に文化省をなくすことです」と答えました。文化とは本来各々の家庭から自然発生的に生まれるもので、官僚が管理したり創造できるものではないと思っているからです。ある笑い話に、ロシア人がハンガリー人に向かって「あなたたちの国には海がないのに、海軍があるのはおかしい」といったら、ハンガリー人は「そういうロシアこそ、文化がないのに文化省があるじゃないか」と切り返したというのがあります。文化は政府主導で作るものではないということですね。そこで人々の関心を集めるためには、単に金をかけるのではなくアイデアが重要だと思います。私は文化大臣として、国の管理ではなく、たとえ小さくても個人所蔵の私立博物館を建てることを支援しました。その結果、1000か所のミュージアムが各地にできました。とはいえ、美術館にあるものだけが文化ではあ

李 御寧氏

りません。私たちの文化は、いま私たちがいる、まさにここにあるんです。一見無骨に見えるこのマイク、この椅子、このテーブル、そして私たちが着ている洋服やネクタイに文化があるんですね。日本には、床の間に美術品を飾る文化があります。つまり、私たちの生活そのものが文化だということです。日本には昔から絣(かすり)の藍色や、紅殻といった伝統的な色彩感覚があります。最近はそれも人によってまちまちな感じがしていますが、色彩感覚は子どもの頃から養われるもので、これこそが文化であり伝統だと思います。日本には歌舞伎や能といった素晴らしい伝統文化があります。清少納言や紫式部が作った素晴らしい物語があります。私はそうした日本文化に尊敬の念を感じています。現代文化はiPodなどの情報端末機なしには語れませんが、重要なのはそのインターフェイスやデザイン性ではなく、芸術・芸能や物語といったコンテンツ(情報内容)だと思っています。日本、韓国、中国には、素晴らしい文化コンテンツがあり余っています。そこで、例えば日本の優れたアニメと韓国のソフト開発力が合わさって、素晴らしいコンテンツを世界に発信していくようなことが必要だと思います。そうすることで、人々の心をわくわくさせるような文化が、アジアから世界へと発信されてくのです。こうした文化は、政治や経済が作り出すものではなく、私たちが生きていることそのものなんですね。

大阪活性化の起爆剤

堀井　李御寧さんからデジタルコンテンツを大阪から発信することが大事だというお話がありましたが、今まさに梅田北ヤード(大阪駅北地区開発)では、そうした拠点が誕生しようとしています。会場に財団法人都市工学情報センターの箕田幹理事長がおられますが、その「ナレッジキャピタル構想」について、少しご発言をいただきたいと思います。

箕田　ナレッジキャピタルとは「知的交流拠点」という意味でございまして、知的な交流を通して新しい技術や文化を誕生させようというものです。そのひとつに、デジタル技術とアートを融合させることで、新たなデジタルコンテンツを生み出そうという試みがあります。例えば以前、中之島の国立国際美術館で、液晶画面に絵を描いてそれを動かすという企画を行いました。私は、その新しいアート表現を見て、こうしたことが大阪における新たな文化力になっていくのだと感じました。一方、そうした文化力を生むアーティストやエンジニアの発掘も重要です。そこでデジタルコンテンツの世界的なコンクールを大阪・関西で開催し発信すれば、インパクトがあると思います。梅田北ヤードは2013年春にまちびらきをしますが、ここを盛り上げていくためには、行政や企業だけではなく、市民も一緒になってイベントや人材発掘をすることが大事だと思っています。

箕田　幹氏

堀井　梅田北ヤードが大阪活性化の起爆剤になるというお話ですが、これに関して蓑さんはいかがお考えでしょうか。

蓑　経済が文化を支えるのではなく、文化が経済を支えるという考え方が大事ですね。文化が栄えて創造力が培われ、それが経済の発展につながるわけですから。これを忘れず、旗振り役が出れば北ヤードのまちづくりも必ず成功すると思います。

堀井　大阪を文化で元気にするのは、歴史的に見ても「民」の力だと思います。例えばサントリーさんは、企業として独自の文化賞などを主宰され、民の力を後押しされています。

鳥井　サントリー創業者の鳥井信治郎は3つのことをよく言っておりました。1つめは何でも積極的にやれという意味での「やってみなはれ」。2つめは「人、もの、金は天下のもの」。すなわち、それらは天からの預かりものだから、いずれはどこかに返さなくてはならないということ。そして3つめは「陰徳積めば陽報あり」。善行をするときは見返りを期待してはならないというものです。これらはすべて母からの教えだそうですが、同時にそれは、大阪の人たちからの影響もあったと思います。信治郎の息子で2代目社長の佐治敬三は、父の意を受けてサントリー美術館やサントリーホールをつくり、「サントリー地域文化賞」や「サントリー学芸賞」を創設しました。こうした活動のバックボーンにあるのは、「儲けた金のおこぼれで文化をすればいい」などという考え方ではなく、信治郎が影響を受けた大阪人の文化に対する「深い尊敬の思い」からきているのだと思います。

サントリーホール(東京都港区)

カミ意識と細やかな日本文化

堀井　日本人のDNAに流れる精神とでもいえるのでしょうか、大阪人に限らず、日本人はもともと繊細な美的感覚を持っているはずです。そうした感性がものづくりにも生かされるべきだし、文化首都を進めていく上で重要になってくると思います。

千田　日本文化の根底には、非常に細やかで微妙な心情があります。それは漢字で書く「神」ではなく、何か説明のつかない「カミ意識」が日本人の心に

千田 稔氏

あるからだと思います。例えば人を励ますときに、「ご活躍をお祈りします」と言いますね。この「祈る」というのは天満宮のような神社に祈るわけではありません。相手の気持を慮って「カミ的」なものに願いをかけているわけです。こうした日本人特有の倫理観や細やかな心遣いで物事を行えば、素晴らしい日本文化が創造されると思います。しかし、そうした心遣いもアメリカの合理主義が入ってきてから断ち切られたように感じます。例えば最近感じることに、講演者が勝手に水を飲めるよう講演台にペットボトルがそのまま置いてあることがあります。確かに合理的ではありますが、日本人ならせめて蓋を空けておくとか、コップを添えるといった細やかな心遣いがほしい。また、梅田北ヤードのお話がありましたが、技術と芸術が一体になるというのは何も目新しいことではありません。表現手法がデジタル化されただけなのです。デジタルというのは情報処理の技術ですから、これだけで文化をつくるものではありません。だから新たな文化を発信するには、日本人が本来持っている細やかな思いを表現することが大切でしょう。また、李御寧さんがおっしゃったように、文化とは生きることです。京都では、オムロンや京セラ、島津製作所などの素晴らしい技術文化が生まれています。これは京都人特有の生きていく文化、つまり細やかな心情の文化があったからではないでしょうか。それがしっかりしていれば、東京に本社を移さずとも堂々と地元で生きていける。また、大阪がよくなれば関西がよくなるという発想は、東京一極集中の大阪版でしかありません。東京が良くなっても地方が良くならないのと同じ。大阪だけが突出しても、和歌山や徳島が良くはならないんです。

教育と文化

堀井　その通りです。ですから大阪だけではなく、関西を視野に文化首都運動を積極的に推進すべきだと考えます。さて、高島さんはこれまでのお話を聞かれてどのように思われますか。

高島　梅田北ヤードでデジタルコンテンツのコンクールを行うというお話については、私が申しました伝統的に見せる仕掛けと関連しています。例えば江戸時代の大阪には、木村兼葭堂という優れた大学者がいました。そこで「木村兼葭堂賞」というのを設立すれば、いかにも歴史と伝統のある大阪特有の文化賞というイメージが訴求できますね。いわば疑似伝統です。また、「文化とは政治や経済の後についてくるもの」という考え方については、私は、日本人はそういうマインドコントロールを受けてきたのだと思います。学校で習う歴史の教科書がそれです。例えば室町時代だと、鎌倉幕府が倒れて室町幕府ができたという政治の動きが書いてあって、その次に農業や商業などの経済の動き、そして最後に当時の文化について触れてある。こんな教育を何年も受けていると、誰でも「文化は政治や経済の変化に対応してくっついているもの」と思ってしまうでしょう。文化を論ずるには、まずはこうした問題も考える必要があると思います。ところで昨今は、若者のコミュニケーション能力の低下を危惧する声が多く聞かれます。「コミュニケーション～」と名のつく学部や学科をおく大学が多いのもそれを反映してのことでしょう。そんな多くの若者に文化は政治や経済の付け足しであるような教育をしてしまったら、いくら私たちが関西の文化力向上について論じても空しいものになりますね。そこで私は、私たちも含めて若い人たちのコミュニケーション能力を高めるひとつの方策として、祭を企画し実行することを提案します。地域の祭でもいいし、マンション入居者たちの祭でもいい。祭は、さまざまな人とさまざまなコミュニケーションをとらなければ催行できません。鳥井さんが、「最近の日本人は構成力・デザイン力に欠ける」と話されましたが、自分たちで祭を組み立てることで、構成力・デザイン力が高まると思います。

オブジェクティブな思考

堀井　若者にどのようなメッセージを送り、支援していくかは重要なテーマですね。

千田　最近は仏像ブームだとかで、奈良に多くの若い人が訪れます。神社詣でをする人も多いと聞きます。そうした心の癒しを求める人の受け皿としては、大阪は奈良の文化力にはかなわないでしょう。昨今の少子化の影響で、大学は学生を確保するためにキャンパス整備に躍起ですが、奈良では、東大寺や薬師寺などの歴史遺産を含めて、奈良を丸ごとキャンパスにしようという構想があります。こうしたことは若い人の心を打つメッセージになるでしょう。

蓑　今の日本の若い人たちには、もっと外国に出て行って勉強してほしいと思いますね。日本だけでは物事をサブジェクティブ（主観的）に考えてしまいがちになりますから。学生時代には、オブジェクティブ（客観的）な思考を養い、学問の面白さを見つけてほしいと思います。

高島　おっしゃるように学問の面白さを知ることはとても大事なのですが、いくら「学問は面白いものだ」といっても、学生には伝わりにくい。であればいっそのこと、「海外で遊んで来い」ぐらい言っても良いだろうと思います。

堀井　本日司会の八木さんは、韓国に90回も行かれたそうですね。そうした海外経験から、若い人に向けてメッセージをお願いします。

八木　私は高校時代に留学を経験しましたが、外国でさまざまな価値観の違いを体験することで人間はかなり強くなれると思います。とはいえ、現在日本人の海外留学者は10年前に比べて４割減だそうです。韓国に90回行ったというのはほとんどが仕事なんですが、それでソウル市観光大賞という賞をいただきました。そのトロフィーというのが、棒状のクリスタルの中にソウル市に流れる漢江（はんがん）の水と土を入れただけのシンプルなものでした。賞品としていただいた化粧品は韓紙で包まれており、私はそうしたものに韓国の誇りを感じました。李先生が「文化は日常のなかにある」とおっしゃったことは、こういうことなんだと思います。日常にあるものを贈るだけでも、貰った人は強く印象に残りますね。また、若者にとっては賞が励みになりますので、北ヤードのアワードは良いアイデアだと思います。

八木早希氏（総合司会／毎日放送アナウンサー）

ほうきの柄を切るな

堀井　鳥井さんは、ウイスキーのマスターブレンダーとして日々ご研究されるなかで、「学び」につてはどのように感じておられますか。

鳥井　サントリーがウイスキー作りを始めて88年になります。これだけ長いことやっていれば、ウイスキーのことは知り尽しているだろうと思われますが、そんなことは全くありません。つい最近も新たな大発見をしました。ですから温故知新とは良く言ったもので、若い人には、古いことのなかに知るべきことがいっぱいあるということを伝えたいですね。

堀井　韓国の学生は日本と比べていかがでしょうか。

李　お手本になることは少ないですね。悪い習慣は韓国にも日本にもあるし、良い習慣はどちらも少ない。若者の変化を年配の先生がよく分かっていなことも共通しています。最近は若者の間でツイッターやフェイスブックが人気ですが、そのような「雑談」を通していろんな情報や生きる楽しさを得ることは、昔からある文化です。ある寓話に、大阪の商店主が丁稚に玄関掃除を言いつけたところ、隣の店の丁稚と雑談ばかりしているのに腹を立て、ほうきの柄を短く切ってしまったというのがあります。柄が短いと上を見て雑談する余裕がなくなりますからね。しかし、こうした功利主義は文化の自然発生を阻害します。無駄口や雑談であっても、それでさまざまな情報がやりとりされ、新たなアイデアが生まれるきっかけにもなるからです。だからほうきの柄を切ってはだめ。下ばかり見ていては希望が生まれません。

堀井　関西の文化力向上と戦略的発信に向け、皆さんからさまざまなアイデアやヒントをいただきました。今後の取り組みにぜひ生かしていきたいと思います。本日はありがとうございました。

堀井良殷氏

李　御寧（イ オリョン／大韓民国初代文化大臣）
※プロフィールはp10に掲載

千田　稔（せんだ　みのる／国際日本文化研究センター名誉教授、奈良県立図書情報館 館長、帝塚山大学特別客員教授）
1942年奈良県生まれ。1968年京都大学大学院文学研究科修士課程地理学専攻、1975年追手門大学助教授、1989年奈良女子大学文学部教授、1995年国際日本文化研究センター教授を経て2005年より現職。『日本の原点　こまやかな文明』（NTT出版）を近刊予定。

高島幸次（たかしま こうじ／大阪大学招聘教授、大阪天満宮文化研究所 研究員）
専門は日本近世史。主著に天神信仰・天神祭を研究した『天満宮御神事御迎船人形図会』『天神祭ー火と水の都市祭礼ー』など。「NPO上方落語支援の会」理事、「繁昌亭大賞」選考委員など兼務。

鳥井信吾（とりい　しんご／関西経済同友会常任幹事、歴史・文化委員会委員長、サントリーホールディングス代表取締役副社長、公益財団法人サントリー芸術財団代表理事）
1953年生まれ。1975年甲南大学理学部、1979年南カリフォルニア大学大学院を卒業。伊藤忠商事を経て1983年サントリー入社。取締役、常務、専務を経て、2003年から副社長。2002年にウイスキーのマスターブレンダーに就任。

蓑　豊（みの ゆたか／兵庫県立美術館 館長）
1941年金沢生まれ。1977年米国ハーバード大学文学博士号取得、1988年シカゴ美術館東洋部長、1996年大阪市立美術館館長、2004年金沢21世紀美術館館長、2005年金沢市助役、2007年サザビーズ北米本社副会長、大阪市立美術館名誉館長、金沢21世紀美術館特任館長を経て、2010年より現職。

堀井良殷（ほりい よしたね／大阪21世紀協会理事長）
1936年生まれ。1958年東京大学卒業、NHK入局。ニューヨーク特派員、大阪放送局長、東京本部NHK理事を経て1999年より現職。著書『なにわ大阪興亡記～だから元気を出さないと～』ほか。大阪文化祭賞選考委員会会長、（社）関西経済同友会「水都・大阪」推進委員会共同委員長など兼務。

中之島宣言

本会議での提言（合意事項）は、
関西・大阪文化力会議2011『中之島宣言』として、
広く市民や行政に呼びかけていきます。

1. 問題意識

●東アジア諸国がダイナミックな発展を遂げる今日、日本の相対的なプレゼンスは低下し、文化・価値観の多様な広がりは、新たな摩擦を生じさせる可能性を孕んでいる。

●グローバリゼーションがますます進展するなか、日本は自らのアイデンティティを再認識し、誇りと自信をもってそれを語り、各国との相互理解を促進し、交流を深めなければならない。

●国の政策が大きく揺れる今、関西の町衆精神を発揮し、民が行動を起すときである。

2. 日本文化の再認識を！

●経済成長一辺倒になりがちな社会において、文化は人生を豊かにし、魅力的な都市づくりと、国際社会における日本の地位の向上に貢献する。

●日本のアイデンティティの源泉は関西にあることを再認識し、自然を畏敬し、共棲する思想や、神々への信仰など、日本文化を関西から発信する。

－上方伝統文化と創造
－“縦書き文化”による異文化理解と漢字の役割
－商家の教えなど、関西が培った経営哲学を世界に発信

3. プロデュース力の発揮！

●地域のポテンシャルを引き出すプロデュース力（デザイン力・構成力）を最大限に発揮する。

－伝統・祭礼行事を核に、国の起源に由来する社寺が集中する上町台地の活性化
－大阪駅前に残された最後の一等地、北ヤードの水都を発信する新たな創造的文化拠点化

●文化をプロデュースし、発信するためのオール関西・大阪のプラットフォームを整備する。

－オール関西で展開する「はなやか関西の文化首都運動」

4. 相互理解のための国際交流の促進！

●東アジアの安定的な発展のため、民間が中心となり相互理解のための海外文化交流を強化する。

－仮称“日中文化交流センター”の実現
－民間（個人ベース）交流のさらなる活性化

●若者支援

5. 文化力向上の仕組みづくり！

●“人こそ文化！”、文化的な感性を養う教育に力を注ぐ。

－小学生から身近に芸術作品（音楽・美術・伝統芸能など）に触れ、文化に興味を持たせる工夫。都市ミュージアムの充実。若手活動家の表彰

●国・自治体への要望

－文化活動を推進する上での自治体の規制緩和・事務手続きの簡素化

閉会挨拶

大阪国際フォーラム会長 **秋山喜久**

日本は世界一の長寿国で所得水準も高く、総合的な国力は世界第9位にランクされています。しかし国民の幸福度は90位と低い。この差は何かということについて、私たちは真剣に検討する必要があると思います。また、企業が海外進出するにあたっては、日本の歴史や文化をバックボーンにしないと失敗するといわれます。その意味で、関西を元気にするには文化力が不可欠です。幸い関西は歌舞伎や文楽といった伝統文化の発祥地であり、日本の世界遺産の半数近くがあるなど、文字通り日本の歴史・文化の中心的地域であります。

本日はパネリストの方々から大変貴重なご示唆をいただき、これを中之島宣言にまとめました。今後はこれに基づき、関西の文化力を高め、より強く世界に向けても発信していきたいと思います。ありがとうございました。

マンガ『ヒカルの碁』の大ヒットで、子どもたちの間で囲碁ブームが起こったのは今から10年ほど前のこと。現在は、若い女性の間で静かなブームを呼んでいるという。その背景には各地の棋院の地道な普及活動もさることながら、華やかな女流棋士の存在も見逃せない。関西棋院に所属する小西和子氏に、女性と囲碁文化について語っていただいた。

【小西和子氏に聞く】女性の囲碁ファンが増えています。

囲碁 女流棋士八段

男女平等な囲碁の世界

囲碁をはじめたのは小学校3年生の頃です。父がプロ棋士から手ほどきを受けていて、私にも「習ってみたら?」と勧めてくれたのがきっかけ。もともと勝負好きの性格だったので、たちまち囲碁に夢中になり、「プロになりたい」と思うようになりました。でも周囲には囲碁をやっている女の子なんていなかったから、学校ではずっと秘密にしていました(笑)。

女流棋士というと、女流同士でしか対局しないと誤解している方がたくさんいます。特別に女流タイトルはありますが、実は基本的に男女ともに同じタイトルを目標に、同じ土俵で戦っています。近年は女流の力が向上し、男性のトッププロに勝つことも珍しくないんですよ。でも残念ながら女流で七大タイトル(棋聖・名人・本因坊・十段・王座・天元・碁聖)を獲得した人はまだいないのですが…。

ともあれ、男女一緒に同じ条件で戦う競技は、囲碁をおいて他にはあまりないように思います。囲碁は保守的なイメージとは裏腹に、女性にとって開かれた社会なんです。

昔、中国では「琴棋書画」(琴、囲碁、書、画)は文人の教養とされ、日本でも『源氏物語』や『枕草子』でお姫さまたちが囲碁に興じるシーンがあるように、囲碁は知的で優雅な遊び。関西棋院の入門講座も女性に人気ですし、囲碁が楽しめる「エストレラ」(天五中崎通り商店街)というおしゃれなカフェバーなどもあって、最近は若い女性ファンが増えていることを実感します。

将棋と囲碁の違いとは

「囲碁と将棋の違いは何ですか?」とよく聞かれます。一般的に左脳と右脳のたとえで説明されることが多く、「将棋は左脳に比重が置かれている」「囲碁は右脳と左脳の両方を使っているけれど、どちらかというと右脳をよく使っている」のだそうです。

私自身は、理論と記憶力がものをいうとされる将棋に対して、囲碁は感性と直感力に負うところが大きいと感じています。

将棋対コンピュータでは、女流最強の方が敗北したそうですが、ファジーさのある囲碁では、まだ人間が優勢です。碁打ちの脳を調べると、数理的に答えをはじき出している人よりも、盤面を画像としてとらえている人が多いのだとか。その感覚は言語ではちょっと説明がつきません。私の場合は画像というより「嗅覚」という感じです(笑)。

こういう囲碁の特性からみても、女性に向いているのではないかと思います。

7大タイトルの3つが関西に

関西の棋界は今、非常に盛り上がりをみせています。それは、日本の7大タイトル中の3つが関西にあるからです。現在、関西棋院所属の棋士では、坂井秀至氏が碁聖、結城聡氏が天元、日本棋院関西支部では井山裕太氏が名人を獲得していますが、これは関西にとっては史上初の偉業なんです。

棋士にとっても良い刺激となっていて、棋院全体が活気を帯びています。私自身もそういう空気の中に身を置くことでタイトルへのこだわりを再確認し、前向きになります。

囲碁は手談

囲碁は日本や中国、韓国、台湾はもとより、世界中に愛好家がいて、世界アマチュア選手権戦には60ヵ国以上もの国々から代表者が参加します。私もヨーロッパや中国などへ遠征し、各国の方と対局したことがあります。対局を通じて友達になった方々もいるんですよ。言葉は通じませんが、対局すると不思議と心が通じ合うのです。いわば言葉を超えたコミュニケーション。囲碁が「手談」といわれる所以ですね。

勝負だけではなく、「心・技・体」のバランスを重視し、高い精神性を有する囲碁の世界…。といってもルールは意外と簡単なのですよ。どなたでもすぐ覚えられますから、やったことのない人はぜひチャレンジしてみてください。一人でも多くの方に囲碁の魅力を知っていただければうれしいですね。(談)

小西和子(こにし　かずこ)
関西棋院所属。水野弘士九段に師事。大阪府出身。中学2年生の時、院生(プロ養成生)になり、1989年8月16歳で入段。2004年5月八段昇格。第19期女流鶴聖戦準優勝。第7、8期女流最強戦準優勝。第5期関西女流囲碁トーナメント優勝。2008年WMSG北京大会に参加するなど、海外遠征の経験も多数。

囲碁教室　問い合わせ先
関西棋院　541-0041 大阪市中央区北浜二丁目1番23号
電　話　06-6231-0186
ホームページ　http://www.kansaikiin.jp/

関西棋院にて

大阪21世紀協会提供　インテリジェントアレー専門セミナー
「都市文化論 ～文化によるまちおこし活動の理論と実践～」

大阪21世紀協会は、大学などの研究機関と連携し、知的成果を社会に活用する“社学連携事業”に取り組んでいます。平成22年度はNPO法人関西社会人大学院連合と連携し、「インテリジェントアレー専門セミナー・都市文化論 ～文化によるまちおこし活動の理論と実践～」を企画・運営。今年1～3月の間、キャンパスポート大阪（大阪駅前第2ビル）で全6講座を開講し、都市の活性化につながる文化創造のあり方などについて、さまざまな視点で検討しています。各講座のテーマと講師は次の通り。(1)欧米諸国の文化政策から学べること／河島伸子（同志社大学経済学部教授）、(2)文化が地域をつくるーサントリー地域文化賞受賞者の活動事例から／小島多恵子（サントリー文化財団主任研究員）、(3)都市文化政策と地域ブランディングー当事者の役割／初谷 勇（大阪商業大学大学院地域政策学研究科教授）、(4)市民による公共空間のマネジメントについて／山崎 亮（（株）studioーL代表取締役）、(5)「経済」と「文化」の戦略的協働による地域活性化／藤原 明（りそな総合研究所プロジェクト・フェロー）、(6)大阪の町人文化に学ぶ：懐徳堂や心学の精神とまちおこし／堀井良殷（大阪21世紀協会理事長）
※(1)～(5)は実施済、(6)は3月24日（木）に実施します。

ホームページで動画映像を配信中!
『水の街道～琵琶湖・淀川水系文化圏』

第1回放送

大阪21世紀協会では、琵琶湖・淀川水系の自然と文化をテーマにした動画コンテンツ『水の街道』をケーブルテレビのK-CATと共同で制作。今年2月から、当協会ホームページで紹介しています。動画映像は計5本の内容で、順次番組を変えて配信します。番組内容は次の通り。(1)自然との共生「川端」（高島市針江地区の「川端」や畑地区の「棚田」を紹介）、(2)山と海をつなぐ使者「幻の魚」（琵琶湖・淀川水系固有の生物を紹介）、(3)銘酒を育む「名水」（淀川水系の名水を使った酒づくりを紹介）、(4)雅楽を支える「鵜殿のヨシ」（雅楽・篳篥＜ひちりき＞に使われる鵜殿のヨシ原について紹介）、(5)世界との玄関口「淀川河口」（江戸末期に世界との窓口だった八軒家浜や川口居留地を紹介）。

第2回放送

交流サロン・21cafe(第21回)開催
ゲスト：小出英詞(住吉大社権禰宜)

平成22年11月20日／大阪市立美術館

小出英詞氏

「21cafe」は、大阪でさまざまな文化活動に携る方々を招き情報交換することにより、新しいアイデアやコラボレーションのきっかけを考え、作り出していく集いです。平成22年度は、大阪ミナミ地区で重点的に開催。今回は、本年御鎮座1,800年を迎える住吉大社にスポットを当て、第1回目の住吉大社・吉祥殿(平成22年7月)に続き、第2回目として「住吉大社1,800年の歴史と美術 特別展」を開催中の大阪市立美術館で開催しました。当日は30名余りの方々に参加いただき、「住吉大社の魅力 再発見」と題して同大社・小出英詞権禰宜が講演。続いて大阪市立美術館学芸員による特別展の見どころ解説の後、交流会と展示鑑賞を行いました。今後も、大阪ミナミに関するテーマも織り混ぜ開催します。

大阪文化祭賞受賞者による特別公演と交流会
アート・アセンブリー(第1弾)開催

平成22年11月29日／社団法人クラブ関西

片岡リサ

関西・大阪を中心に活躍するアーティストを、大阪21世紀協会賛助会員の皆様などにご紹介し、アーティスト支援の輪を広げることを目的とした「アート・アセンブリー(大阪21世紀協会主催)」。その第１弾を、(社)クラブ関西(大阪市・北区)の全面的な協力により開催しました。当日は50名の参加者に対し、平成22年度大阪文化祭賞を受賞した箏演奏家の片岡リサさんとア・カペラ混声合唱団のザ・タロー・シンガーズによるサロン形式の特別公演と交流会が行われ、文化に浸るひとときをお楽しみいただきました。この催しは「“21世紀の懐徳堂”プロジェクト」のひとつでもあり、大阪市、大阪大学、ナカノシマ大学の後援も得て実施されました。

ザ・タロー・シンガーズ

後援･協賛イベント

第12回大阪国際音楽コンクール

ピアノ・弦楽器（小学3年生以上）、管楽器・声楽（中学生以上）対象の音楽コンクール。ファイナルでは世界の音楽界に通用する逸材を発掘し、授賞とともに演奏機会を提供。◆受付・予選（テープ審査）4月1日（金）～、地区本選（日本および海外）7～9月、ファイナル10月1～2日・5～8日（ムラマツリサイタルホール新大阪他）、グランドファイナル＝ガラコンサート10月9日（日）／高槻現代劇場中ホール／グランドファイナルのみ有料／問合せ：大阪国際音楽コンクール事務局☎06-6625-5931、FAX06-6625-5934

OSK日本歌劇団 レビュー 春のおどり

大阪生誕88年・OSK日本歌劇団による春の名物催事。出演・桜花昇ぼる、高世麻央、朝香櫻子、桐生麻耶、緋波亜紀、牧名ことり、折原有佐ほか団員総出演。◆4月3日（日）～9日（土）12：00～・16：00～、10日（日）11：00～・15：00～／大阪松竹座／1等席8,000円、2等席4,000円／問合せ：OSK日本歌劇団☎06-6362-8838、FAX06-6362-8839

桜花昇ぼる

第15回なにわ人形芝居フェスティバル～逢坂・花参り～

天王寺区逢坂一帯の寺社で人形劇を上演。寺町の歴史・文化を身近に感じてもらい、周辺一帯の活性化と文化振興を図る。◆4月3日（日）10：00～16：00／大阪市天王寺区逢坂一帯の寺社、劇場等／フリーパスシール500円※未就学児は無料／問合せ：なにわ人形芝居フェスティバル運営委員会事務局☎06-6774-2877、FAX06-6774-4003

バリアフリー2011

高齢者・障がい者の生活を快適にする福祉機器・製品をはじめ、総合的な福祉情報を発信。◆4月14日（木）～16日（土）10：00～17：00／インテックス大阪／無料／問合せ：バリアフリー展事務局☎06-6944-9913、FAX06-6944-9912

「伝統と創意」'11日本書芸院展

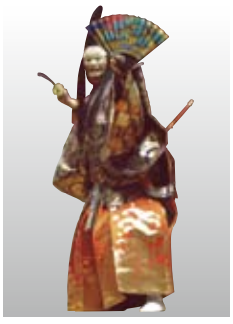
文化勲章受章者、文化功労者、日本芸術院会員をはじめ、日本書道界で活躍する日本書芸院役員が大作・力作を披露。◆4月19日（火）～24日（日）10：00～17：00／大阪国際会議場3階特設会場／無料／問合せ：公益社団法人日本書芸院事務所☎06-6945-4501、FAX06-6945-4505

楽劇「保元物語」～崇徳怨霊譚～

能とオペラを統合した新様式の楽劇。崇徳の出生の秘密から保元の乱の悲劇にいたる展開にオペラ的表現を導入。西洋管弦楽との協奏も斬新。出演・梅若玄祥（六郎）他◆4月23日（土）18：30開演／兵庫県立芸術文化センター／SS席20,000円、S席15,000円、A席10,000円、B席8,000円、C席4,000円（前売りは各席とも15%off）／問合せ：関西楽劇フェスティバル協議会事務局☎・FAX06-6940-0731

大槻能楽堂 自主公演能

能の魅力を探るシリーズ（平家物語を観る～「戦のあわれ!」を語る）、ナイトシアター（一部ろうそく能）、夏休みおやこ教室など全19公演。◆4月23日（土）～平成24年3月24日／大槻能楽堂／有料／問合せ：（財）大槻能楽堂☎06-6761-8055、FAX06-6761-3399


平家物語シリーズ『屋島』
（7月24日公演）

2011日本民謡ジュニアフェスティバル全国大会

幼児から中学生までの民謡全国大会。コンクール（幼児以外）、75歳以上の高齢者と子どもたちが一緒に歌う企画もあり。◆4月29日（金・祝）10：00～17：00／大阪府立中央図書館ライティホール／入場無料（整理券発行）／問合せ：（社）全大阪みんよう協会事務局☎・FAX06-6757-7051

アマチュアクラシックフェスティバル2011 ピアノ・声楽コンクール

意欲あるクラシック愛好家が、経歴や年齢を問わず出場できる機会を提供。本コンクールを契機に、プロを目指す音楽家の育成や府民のクラシック音楽への関心を喚起。◆4月29日（金・祝）13：00～16：00／ザ・フェニックスホール／前売2,000円、当日2,500円／問合せ：KOSMA事業課☎078-646-9001、FAX078-646-9002

第56回新世紀大阪展

第56回新世紀横浜展の作品（油彩、水彩、アクリル、版画等）と大阪支部所属作者の作品約220点を展示。作者と鑑賞者の交流、大阪における芸術文化の発展に寄与。◆5月10日（火）～15日（日）9：30～17：00／大阪市立美術館／有料／問合せ：大阪支部・芦田☎090-8236-6599・FAX0775-64-6558

第25回帝塚山音楽祭

帝塚山地域の活性化と青少年の文化意識の啓蒙をめざす、地域住民による手づくりのまつり。多くの音楽家や芸術家が出演に協力。◆5月28日（土）～29（日）10：00～23：00／大阪市住吉区万代池公園および周辺会場／無料（ライブストリート店のみ有料）／問合せ：帝塚山音楽祭実行委員会事務局☎・FAX06-6678-0022

SIGN EXPO 2011（第26回広告資機材見本市）

サインという分野にとどまらず、音や光などを含む新しい情報広場。新時代のライフスタイル・デザインのありかたについて出展者と消費者が共に考え、関連業界の市場活性化をめざす。◆6月15日（水）～17日（金）10：00～17：00／ATC（アジア太平洋トレードセンター）ホール／無料／問合せ：近畿屋外広告美術組合連合会☎06-6776-8118・FAX06-6776-8055

※<有料>の金額については、各問合せ先にお問合せください。
※ここに紹介する以外にも、大阪21世紀協会は多数のイベントなどを後援しています。

大阪21世紀協会賛助会員へ入会のお願い
大阪の活性化のため、皆様のご支援をお願いします。

会　費（何口でも結構です）
■法人会員一口につき年会費10万円
■個人会員一口につき年会費1万円

特　典
1.協会が発行する刊行物の配布
2.協会が主催する各種セミナーなどへの案内
3.賛助会員の参考となる情報・資料の提供など

お問合せ（財）大阪21世紀協会　総務チーム　TEL.06-6942-2001 FAX.06-6942-5945

大阪21世紀協会広報誌『OSAKA*文化力』

バックナンバー紹介

関西・大阪のオピニオンリーダーや芸術、音楽、伝統芸能などに活躍する人々にスポットをあて、提言や日頃の活動を紹介。協会活動や企業メセナ、イベント情報など多彩な話題を掲載しています。季刊発行で、大阪21世紀協会の法人・個人賛助会員の皆様などにお届けしています。大阪21世紀協会ホームページでもご覧いただけます。

HYPERLINK "http://www.osaka21.or.jp/"
http://www.osaka21.or.jp/

■バックナンバーをお譲りします。
大阪21世紀協会までお問合せください。
財団法人大阪21世紀協会
〒540-0032大阪市中央区天満橋京町1-1
☎06(6942)2001　FAX06(6942)5945

No.101(2008年／春号)
世界初の細胞融合に成功した岡田善雄氏(大阪大学名誉教授)と、JT生命誌研究館館長の中村桂子氏に、関西における生命科学の未来像を聞く(巻頭)。武田佐知子大阪大学副学長に『21世紀懐徳堂』開設の目的を聞く(大阪文化考)。表紙は同氏。

No.102(2008年／初夏号)
ブロードウェイミュージカルを大阪で初演した出口最一氏(演劇プロデューサー)と、ミナミ活性化委員会の中西俊臣氏が大阪の演劇文化を語る(巻頭)。全国初の"食の大学院"設立に向け、発起人の石毛直道氏(国立民族学博物館名誉教授)にもインタビュー。表紙は出口最一氏。

No.103(2008年／秋号)
「好きやねん大阪」キャンペーンの間違い、大阪が「都」になったらどうなるかなど、山崎正和氏(劇作家・大阪大学名誉教授)の考えを聞く(巻頭)。東京生まれ育ちの浪曲師・春野恵子氏が、大阪で感じる空気や大阪浪曲界の現状を語る(大阪文化考)。表紙は山崎正和氏

No.104(2008年／冬号)
関西のブランディング運動やクラシック振興などの今後について、関経連副会長の寺田千代乃氏と関西フィルハーモニー管弦楽団首席指揮者・藤岡幸夫氏に聞く(巻頭)。漫画家・里中満智子氏が、大阪の文化歴史遺産公開にアイデアを語る(大阪文化考)。表紙は同氏。

No.105(2009年／春号)
財政難による文化事業予算の大幅削減への危機感から、大阪文化の灯を守る緊急座談会(21cafe拡大版)を特集。水都大阪2009のプロデューサー・北川フラム氏に、大阪の都市再生に果たすアートの役割を聞く。表紙は同氏

No.106(2009年／夏号)
水都大阪の再生に活躍する佐藤茂雄氏(京阪電鉄代表取締役CEO)、伴一郎氏(伴ピーアール代表取締役)、二見恵美子氏(E.M.Iプロジェクト代表)を招き、大川・中之島周辺での船上座談会を収録。表紙はそのときの三氏。

No.107(2009年／冬号)
宮原秀夫氏(情報通信研究機構理事長)とヤノベケンジ氏(大型機械彫刻作家)が、科学と芸術のコラボレーションの近未来像を語る(巻頭)。表紙は有森裕子氏(NPO法人スペシャルオリンピックス日本理事長)。

No.108・109合併号(2010年／春号)
平成22年1月実施の「関西・大阪文化力会議2010」を詳録。各界のオピニオンリーダー 35名が、関西・大阪が抱える文化的課題と文化力向上への方策を探る。表紙はチェリストの林裕氏(平成21年度大阪文化祭賞グランプリ受賞)。

No.110(2010年／夏号)
OSK日本歌劇団のトップスター桜花昇ぼる氏と大阪歴史博物館館長の脇田修氏をまじえ、レビューから古代難波宮まで、時代や地域を越えてつながる関西の文化を語る(巻頭)。表紙は桜花昇ぼる氏。

No.111(2010年／冬号)
免疫系で重要な働きをする「セマフォリン」を世界で初めて発見し、平成22年度の大阪科学賞を受賞した熊ノ郷淳氏(大阪大学教授・医学博士)に、免疫学がリードする医療革新について聞く(巻頭)。表紙は箏演奏家の片岡リサ氏(平成22年度大阪文化祭賞受賞)。

誌上舞台

歌舞伎

江戸時代、初代坂田藤十郎によって創始された上方歌舞伎の芸風、上方和事は、荒唐無稽な江戸の荒事に対し、写実的でリアル、情を表現する芝居である。その伝統を受け継ぎ、盛り立てていく関西期待のホープ、坂東薪車さんにご登場いただいた。音羽屋！

歌舞伎俳優

坂東薪車（ばんどうしんしゃ）

音羽屋。門閥外から上方歌舞伎のベテラン俳優、坂東竹三郎に入門。平成10年大阪松竹座「ヤマトタケル」の舎人、熊襲の兵士にて初舞台。坂東竹志郎を名乗る。平成17年、坂東竹三郎の芸養子として、大阪松竹座「第二回浪花花形歌舞伎 車引」の杉王丸にて、四代目薪車を襲名。平成18年咲くやこの花賞受賞。

「ええ役者やなぁ」と言われるように

歌舞伎俳優は役者の家に生まれた門閥と、国立劇場歌舞伎俳優養成研修の卒業生がなれるのが基本です。そういう意味では私はかなり異質な経路で（笑）この世界に入りました。千葉の一般家庭に生まれ育ち、中学生の頃に役者になりたいという思いが芽生え、高校在学中にミュージカルのオーディションを受けて合格し進路を決めました。その後、プロダクションに入り日本舞踊を習った時に、日本の文化っていいなぁ、時代劇に出たいと思ったのです。折しも市川猿之助さんのスーパー歌舞伎『ヤマトタケル』のエキストラの仕事が入って。衝撃が走りましたね。出番がなければ帰ってもいいのですが、何ヶ月も朝から晩まで夢中で稽古を見ていました。そんな私に「あんた、芝居好きやねんなぁ」と声をかけてくれたのが今の養父、上方の歌舞伎役者、坂東竹三郎でした。当時お弟子さんに空きがあり、歌舞伎のことを何も知らずに飛び込んだのが23歳。でもその時もまだ歌舞伎役者になれるとは思っていませんでした。父の家は日本舞踊、東山村流の家元でもあり、3年間みっちりと踊りの稽古を積み、坂東竹志郎という名前をいただいて初舞台を踏んだのが26歳。遅いですよねぇ（笑）。

歌舞伎の演技の勉強は女形の踊りから入るのが流れです。私は男を演じる立役ですが、立役でも女形の要素が身についていなければできない役が上方和事にはたくさんあります。はんなりとして、匂い立つような色気があり情をストレートに出していく役が多い。よく「色気がない！」と肩をぽんとたたかれたり。色気ってなんなんだろうと（笑）。本当に難しい。だから自主公演では少しでも体に馴染ませるために、女形の舞踊を踊るようにしています。

平成17年に芸養子にしていただき、父の前名の薪車を襲名したときに、一生かけて上方歌舞伎を突き詰めていき、また次の代に引き継いでいかなくてはと決意を新たにしました。上方歌舞伎の活性化が私のエネルギーになっていて、同じく関西在住の片岡愛之助さんとは一緒に盛り立てていこうといつも話しています。封印切の忠兵衛、夏祭浪花鑑の団七九郎兵衛、仮名手本忠臣蔵の勘平など、やりたい役はたくさんあります。

6月には大阪松竹座で藤山直美さんと『夢物語　華の道頓堀』のお芝居をさせていただきます。今回で3回目の共演ですが、最初は震えましたね（笑）。なにせ相手は日本一の女優さんですから。でも一生懸命やるから鍛えがいがあると思っていただけたのでしょうか。私も度胸がつきました。今回は江戸の歌舞伎役者の役で、上方にやって来て注目を浴びますが挫折もあり、旅館の仲居役の直美さんが励ましてくれて…という物語。お芝居は歌舞伎で勉強してきたことを試せる絶好の機会でもあり、またお客様の反応を見て、お客様と相談しながらつくっていくという醍醐味もあります。関西のお客様の目は厳しいですから。好き、嫌いの反応がストレートに返ってくるし、良かった時の拍手の音が違いますから。

将来的には「ええ役者やなぁ」と呼ばれるような、舞台に出てきただけで存在感や匂いがあり、内からエネルギーを発するような歌舞伎役者を目指しています。今日よりも明日、今月よりも来月の気持ちで芸を追求していきたいと思っています。

大阪松竹座6月公演
『夢物語　華の道頓堀』
平成23年6月5日（日）～28日（火）
昼の部11時～、夜の部16時～
※8、10、13、16、19、22、24、27、28日は昼一回公演
一等12,600円、
二等7,350円、
三等4,200円

大阪松竹座
地下鉄
「なんば駅」
14号出口
徒歩約1分
Tel.06-6214-2211
http://www.shochiku.co.jp

財団法人 大阪21世紀協会
ホームページ　http://www.osaka21.or.jp
発行日／平成23年3月15日
発行・編集／財団法人大阪21世紀協会 〒540-0032 大阪市中央区天満橋京町1-1 大阪キャッスルホテル4階 TEL.06(6942)2001 FAX.06(6942)5945
発行人／佐々木洋三　編集統括／髙橋英子　編集協力／株式会社インサイト　印刷／株式会社NPCコーポレーション
本誌は再生紙を使用しています。